

アーネスト・サトウが大室古墳に来たわけ

—— 国際理解・郷土理解の教材開発 ——

能 登 健・長 沼 孝 則

はじめに

I アーネスト・サトウの生涯

II 幕末から明治初期の列強外交をどう扱っているのか

III アーネスト・サトウが大室に来たわけ

IV アーネスト・サトウの日本研究

V 教材化に向けて

おわりに

アーネスト・サトウについて学ぶためのホームページ

アーネスト・サトウに近づくための本

アーネスト・サトウを知るための論文

明治期の大室古墳群について書かれたもの

アーネスト・サトウの「上野地方の古墳群」を原文で読んでみよう

アーネスト・サトウの旅

アーネスト・サトウ関係年表

要 旨

平成14年度から、小中学校では「総合的な学習の時間」が創設されます。この時間の中では横断的・総合的な学習や児童の興味・関心等に基づく学習など創意工夫を生かした教育活動を行うことが求められています。この授業の中で使える教材を開発、提案することを目的としてその主題となるものを探しました。そこで目を付けたのが、明治13年に前橋の大室古墳群を訪れた、イギリス外交官のアーネスト・サトウです。サトウは4泊5日の日程で東京から大室を目指しました。

サトウが大室古墳群を訪れたのは、日本を知りたいという好奇心に突き動かされたからです。サトウは工作上、日本について詳しく分析する必要がありましたが、彼の分析の仕方は当時の政治や経済活動にばかり目を奪われていませんでした。サトウは日本を理解するために、その歴史や風土を理解することに努めたのです。

こうしたサトウの方法は、私たちが国際理解をしていく上にも大変重要な視点を明らかにしてくれます。国際理解するにはその前提として、自分たちの文化や歴史を理解していなくてはなりませんが、彼の方法は私たちが、自分たちの歴史を解き明かすその方法を教えてくれます。さらにその方法は、私たちが外国を理解するときに取るべき方法でもあるのです。ここでは、サトウがしたように大室を訪れ、調査し、その成果についても学ぶことで、私たちの郷土理解から国際理解へと広がる学習を提案します。

キーワード

対象時代	古墳時代、幕末・明治時代、現代
対象地域	大室古墳（群）
研究対象	アーネスト・サトウ、国際理解、郷土理解、教材開発

はじめに

アーネスト・メイスン・サトウ (Ernest Mason Satow) は、幕末から明治にかけての日本の歴史が激しく動いた時期を、イギリス政府から派遣された外交官という立場で体験しました。そして明治維新に多くの影響を与えた人物として歴史上に名前を残しているイギリス人です。

サトウは外交官としての姿の他に、開国間もない日本を歴史、地理、言語、宗教など様々な分野で研究したジャパノロジスト (Japanologist)、いわゆる日本学者としても知られています。日本の節目となった時期に大きな足跡を残し、当時欧米ではまだおとぎの国だった日本を、確かな研究を通じた情報として欧米に紹介しました。しかし、現在小中高校のどの教科書を見ても彼の名前は出てきません。

そのサトウが1880年 (明治13) 3月、群馬県前橋市の大室古墳群を訪れています。サトウは何を目的にここに来たのか。それを探りながら、サトウの目指す日本研究と、それを背景にしたサトウの外交に対する姿勢をここでは見ていきます。

さらに、このサトウの外交姿勢から本当の国際理解とは何かを探っていき、グローバリゼーションの中での、新しい国際理解教育の情報を抽出してみたいと思います。

I アーネスト・サトウの生涯

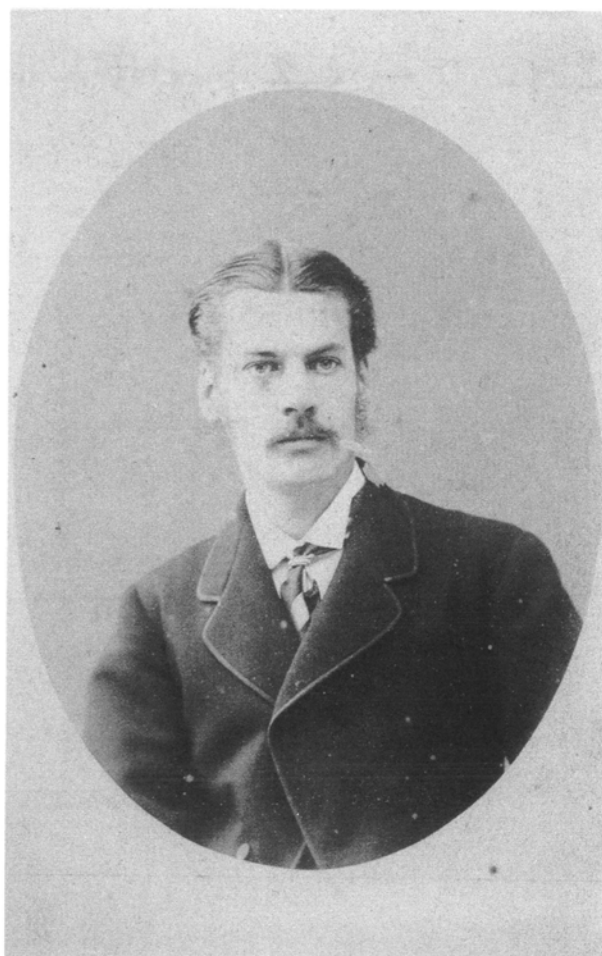
1 『エルギン卿遣日使節録』との出会い

サトウは1843年6月30日、ロンドン北東部のクリプトンで11人兄弟の3男として生まれました。父はスウェーデン人で金融業を営み、母はイギリス人でした。イギリスではイギリス国教徒が多いのですが、サトウ家はプロテスタントのルーテル派という非国教徒でした。しかし、若いころのサトウはあまり信仰心は厚くなく、45歳の時に両親とは違うイギリス国教会に入信しました。

『アーネスト・サトウ伝』によると、サトウはペスタロッチの教育を実践する私立学校に通った後、1856年13歳でミル・ヒル・スクール (Mill Hill School) で寄宿舎生活を始めました。しかし、後にこの学校を「退屈で古くさい場所」とサトウは表現しています。この学校を3年で主席に上りつめたサトウは奨学金を貰うことになり、それによって1859年、16歳という若さでロンドンのユニバーシティ・カレッジへと進学を果たしました。

彼が大学時代に何を学んでいたのかは明らかになっていませんが、当時はハーバート・スペンサーやダーウィンなどが活躍していた時代でした。こうした環境からサトウが実証主義的に人生をとらえ始めたのはこの時期だったと考えられています。

さて大学に通い始めて2年がたった頃、1冊の本との出会いが待っていました。兄の一人が図書館から、東ア

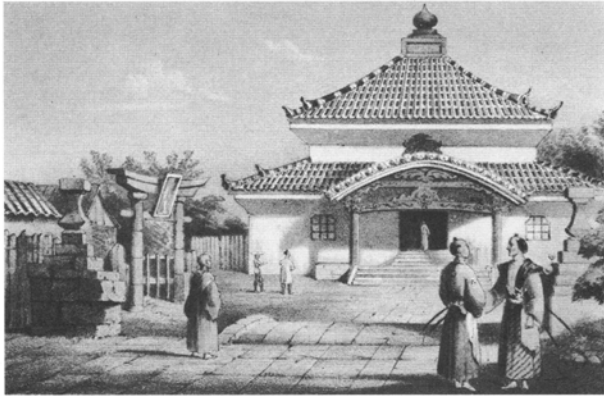


1869年当時のアーネスト・サトウ (横浜開港資料館蔵)

ジアの生活を、彩色された挿し絵で紹介した『エルギン卿遣日使節録』という本を借りてきたのです。この本はローレンス・オリファントという、日本と日英修好通商条約を結ぶために来日したエルギン卿に随行してきた人が書いたものでした。サトウが晩年書いた『一外交官の見た明治維新』という、滞日体験を描いた本の書き出し部分では、この本との出会いが次のように描かれています。

「ほんの思いがけないことから、私は日本に心をひかれはじめたのである。私が十八歳のとき、兄がミューディー図書館からローレンス・オリファントの書いた『エルギン卿のシナ、日本への使節記』というおもしろい本を借りてきた。やがて私のところへも回覧されたが、絵草紙ふうのこの本が私の空想をかりたてたのである。」

こうしてサトウはこの本を通して日本と出会い、彼の人生は大きく動き出したのです。



『エルギン卿遣日使節録』の挿絵
「江戸のイギリス使節団滞在所」

2 日本への道のり

オリファントの本によって日本への思いが芽生えたところに、サトウは大学の図書館で、外務省がシナと日本に行く通訳生を3人募集しているという告示を目にしました。これは日本に行ける絶好のチャンスでした。そこでサトウは、学位を取得した後はケンブリッジのトリニティー・カレッジへの進学を希望していた両親を説き伏せたのです。しかしこの通訳生になるには公開試験を受験しなくてはなりません。この試験には年齢制限がありましたが、サトウは数時間早く生まれたことでこの条件を満たせたのです。そして最年少ながらこの試験をトップで合格しました。

当時の東アジアはイギリスと清朝の間でアヘン戦争やアロー戦争が起これ、太平天国の乱の真っ只中という状態でした。当然イギリスの目は清朝に注がれていました。サトウが日本と出会った本に登場するエルギン卿ですが、彼も実は日本訪問は主な目的ではなかったのです。そもそも彼はアロー号事件の特派使節として清に赴いていました。事件の講和条約である天津条約の最終的な確認と、同意の手続きを取るために、交渉相手である清朝側の委員が上海に到着するのを待っていたのですが、その間に2、3週間の余暇が出来ました。そこでこの休みを利用して、日英修好通商条約を結ぶ交渉を行うことと、イギリス女王から日本に贈られた豪華快走船エンペラー号を日本に届けることを目的にエルギン卿は来日したのです。このことから、当時の欧米の外交では、清朝に比べ日本への興味は軽かったことがわかります。ですから、外交官としては清朝との交渉にかかわる方が、活躍する機会は多いと思われていたのですが、サトウは最初からの希望通り、日本行きを選んだのです。

1861年8月、サトウは自分が半生を過ごすことになる日本の領事館の通訳生という辞令を外務省から受けました。そして10月に行われるユニバーシティ・カレッジの最終試験を受ける必要があったため、出発を延期してもらい、ついに11月サトウは日本に向けて出発したので

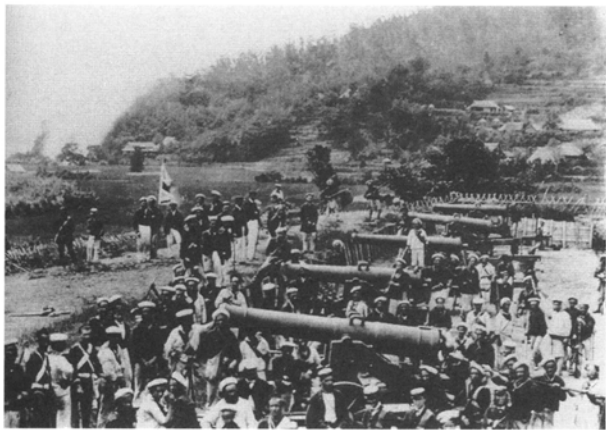
す。しかし、サトウが初めて土を踏んだ東アジアは清でした。当時の駐日イギリス公使だった、オールコックは自分の体験から、日本語を学ぶにはその基礎として中国語を学んでおくに近道だと思っていたので、自分の所に配属されてくるサトウたちに中国語を北京で学ばせようとしたのです。そのため、1862年4月から数ヶ月を北京で中国語の習得に費やさなければならないことになったのです。しかし、オールコックが休暇で帰国している間代理公使にを勤めたニール中佐は、サトウたちをすぐに日本に呼び寄せたのでした。そしてついにこの年の9月8日、あこがれの日本にサトウは第一歩をのしこりました。サトウはこのとき19歳になっていました。

3 外交官サトウ

サトウが日本にたどり着いたときの国内の様子はどうかだったのでしょうか。サトウが横浜に到着してからまだ2週間というときに一つの大きな事件が起きました。薩摩藩主の前をイギリス商人リチャードソンが乗馬で横切ったために、藩士に殺害されたのです。生麦事件として知られる事件ですが、こうした攘夷の風が吹き荒れる中にサトウはやって来たのです。

こうした環境の中でも、サトウは通訳生のやるべき事として、日本語の習得が最優先であることを分かっていました。その努力の甲斐あって、来日して1年と経たない、1863年6月には幕府の閣老から届いた短い書簡を訳す機会がありました。そしてこの翻訳を行ったイギリス公使館員3人の中で一番良い翻訳ができたという自負を持てるまでに、サトウは成長したのです。そしてその2ヶ月後の8月には薩英戦争に従軍しました。そこでこの日本語の能力を通訳として発揮したのです。翌年7月には下関戦争を避けるためにイギリス留学から急きょ帰国した、長州藩士の伊藤博文と井上聞多を、長州に届けるために横浜から軍艦で長州に向いました。この船上で、後の討幕運動の中心となる伊藤や井上たちとの個人的な交流が始まったのです。そうした交流が出来るまでにサトウの日本語能力は上達していたのです。こうして、まさに日本の激動の中心地でサトウはその日本語能力を活かして活躍しはじめました。

サトウは1866年3月から5月にかけて、こうした外交の場面や友人らとの交流の中で芽生えてきた考えをまとめて、横浜の英字新聞に発表しました。これを日本語訳したものは「英国策論」と名付けられました。最初英字新聞に載ったサトウの論文は無署名でした。なぜかという、当時オールコックから変わって駐日公使になっていたパークスの考えはサトウとは違っていたのです。パークスはまだ徳川幕府への期待感が強かったために、サトウは公使館員として、そのことに配慮したのかもしれない。その後、サトウの思惑以上に、日本の歴史は



下関戦争で前田村砲台を占領したイギリス軍
(横浜開港資料館蔵)

大きく動き、徳川家は大政を奉還しただけでなく、大名の座も手放すことになったのです。こうした動きを見届けた1869年2月24日、休暇をとって初めての帰国を果たしました。この1回目の日本滞在がサトウにはとても思い出深かったようで、後に友人に宛てた手紙では、「1862年から1869年までは私の人生の中でももっとも興味あふれる時期であった」と語っています。

帰国から1年半が過ぎた、1870年11月には2度目の来日を果たしました。翌年には日本人で10歳年下の武田兼と結婚し、二人は2男1女をもうけました。この中でも次男の武田久吉は植物学を志し、ロンドンのキュー植物園にサトウの薦めで留学もしています。そしてその後尾瀬などをフィールドとして活躍する植物学者になるのです。

この2回目の来日からは、サトウは外交官としての顔の他に日本学者としての活躍が目立ってきます。1872年に横浜の英米人が中心となって日本アジア協会という研究者団体が出来ました。サトウはその第1回の例会の時に「琉球についての覚書」を報告しています。この論文はイギリスでも、琉球がどこの国に属するのかという、領土問題に絡んで、重要な資料を提供したのです。そして後々サトウは協会の中心人物となっていきました。1874年に父が亡くなったのを機会に2度目の帰国をしますが、この帰国中も広くヨーロッパを回り、日本学者との交友を深めています。1874年再来日するときには、帰国途中で受けたパークスの命令で、西南戦争が起こる直前の鹿児島の様子を視察するために、鹿児島へと赴き、西郷隆盛と面会を果たしています。

また、2回目と3回目の来日ではその期間中に35回の国内旅行をして、その延べ日数は450日にも達しました。その様子は1880年に前橋の大室古墳群を訪ねた時のことも含めて、日本アジア協会の例会で発表しています。そしてその集大成は1881年3月にアルバート・ジョージ・シドニー・ホーズとの共著で『中部・北部日本旅行案内』

『中部・北部日本旅行案内』序論のテーマと執筆者

テ	マ	執	筆	者
日本語		—		
遊歩規定		—		
内国旅券		—		
狩猟免許		—		
通貨		—		
度量衡		—		
地図と参考書		—		
手荷物		—		
服装		—		
食糧など		—		
旅宿		—		
道路、乗り物、料金など		—		
日本の入浴と温泉		エルヴィン・ベルツ		
旅行心得		—		
主要ルート一覧表		—		
電信局全覧		—		
地理		J・J・ライン		
天候と気象		J・J・ライン		
動物学		F・V・ディキンズ		
植物学		F・V・ディキンズ		
神道		E・M・サトウ		
仏教		E・M・サトウ		
絵画美術		W・アンダーソン		
彫刻美術		W・アンダーソン		

として出版されました。この本も第3版からは編著者がバジル・ホール・チェンバレンとウィリアム・ベンジャミン・メイスンに変わりましたが、1922年の第9版まで版を重ねられた、息の長いガイドブックになりました。サトウらの編集による最後の版となった第2版を見ると、この本には64の国内旅行のルートが紹介されています。さらに特徴的なのが、序論として表1の24のテーマについて詳しい解説が加えられている点です。これらはサトウとホーズの二人が当時の在日外国人を中心に原稿を集めたものでした。

このガイドブックは、当時ヨーロッパで発行されていたマレー社の人気のガイドブックの書式に合わせて編集されたものでしたが、当時日本にいた外国人の日本研究がいかに広い範囲に及んでいたかを知ることが出来るでしょう。

1882年12月再びサトウは帰国します。サトウの通訳官としての在日は、この時で終わります。初めて日本の地を踏んでから実に20年の月日経っていました。1884年にバンコク駐在代表兼総領事に任命されるまでの間も、ヨーロッパ各地を旅行しています。また、駐英大使となっていた森有礼の紹介でハーバート・スペンサーとの面識が生まれたのもこの時でした。サトウも実証主義的な思想を持っていたので興味深い出会いだったことでしょう。さて、初めて総領事として赴任したバンコクでしたが、その気候はサトウには合わなかったようで、半年も経たずに休暇を取って再来日してしまいます。

若いころから日記を書き続けていたサトウですが、この時の日記に初めて、妻の兼の侍つ家に立ち寄ったことが書かれたのです。休暇で来日するという気安さが、家族への思いを日記に残させたのかもしれませんが。この休暇を利用した来日は2ヶ月弱にも及んでいます。さらに2年後にも3ヶ月に渡ってこうした休暇を日本で過ごしています。1887年6月にはバンコク勤務を終えて英国に戻り、再び日本へ派遣されることを希望しますが、その夢はかないませんでした。この帰国中はイタリア、スペイン、ポルトガルを回って、日本におけるイエズス会の活動を調べるために、彼らが本国に送った書誌を調べています。この旅の成果は『日本耶蘇会刊行書志』としてまとめられました。この本は日本の書誌学の先鞭をつけるものとして評価されています。

1889年からは4年間南米ウルグアイの弁理公使、その後はアフリカモロッコの駐箚特命全権公使を2年勤めました。その頃日本は日清戦争を経験し、日本を見る外国の目も変化してきました。着実に力を付けて、世界に登場してきた日本に派遣する日本駐箚特命全権公使として、日本に精通したサトウに白羽の矢が立ったのでした。そして1895年5月、実に12年ぶりにサトウは駐日公使として日本に着任したのです。東アジアをめぐる政局が大きく変わりつつある難しい時期でしたが、忙しい公使としての仕事の合間に日光に別荘を建てたり、日本研究を深めたりと若い頃と変わらない精力的な活動をしました。そして57歳になった1900年、清の駐箚特命全権公使へと任命されました。初めて通訳生として東洋に赴くとき、日本を選んだサトウでしたが、今度は日本勤務から清へと活躍の舞台を移すことにしたのです。当時イギリスを含む列強と清朝の間には義和団事変をめぐる賠償問題がありました。自国の利益を追求める各国の代表の中で、サトウはこの交渉を進める必要がありました。1906年、清での任務を終えて帰国する途中、日本に立ち寄りました。この時の3週間の滞在がサトウにとって最後の日本となったのです。この時のサトウは次男の久吉と日光へ旅行しています。さらに日本を離れてからは、体が弱かったためにアメリカで農場を経営していた長男の元にも立ち寄っています。こうして63歳の時、実に45年に及ぶ外交官生活にピリオドを打ちました。それからのサトウはオランダ、ハーグの国際仲裁裁判所の英国代表に任命され、またオタリー・セント・メリーというイギリス南西部に家を構えました。ここでの生活は若い頃に過ごした日本の公使館で一緒だった、アストンが近くに住んでいたため、彼との往来が多い生活を送りました。晩年のサトウは日本で買い集めた書籍を売ったり寄付してしまい、西洋文学や西洋美術へと帰って行きました。しかしこうした中で『一外交官の見た明治維新』(A Diplomat in Japan)を出版しています。これは初来日をして、

江戸幕府が崩壊するのを目の当たりにした時の日本での経験を、書き続けていた日記を元に書き起こしたものでした。

1929年8月に、サトウはオタリー・セント・メリーで86年に及ぶ生涯を閉じました。外交官を引退してからも実に22年の歳月が流れていました。サトウの最期は、サトウに伴って渡英していた本間三郎が見とり、東京にいるサトウの妻、兼に訃報を知らせています。

II 幕末から明治初期の列強外交をどう扱っているのか

1 教室での開国理解

近年の教科書までは、アーネスト・サトウという名前やサトウの著作「英国策論」という言葉を、ごく少ない教科書の中ですが、見ることが出来ました。しかし現在使われている教科書の中では、サトウについて書かれているものは見あたりません。

ここでは、平成14年度から使われ始める小中学校の教科書の中や、現在高校で使われている教科書の中で、サトウが活躍した幕末から明治維新の時代が、どのように載っているのかを見ていきます。特に世界の歴史の中で、日本の立場がどうだったのか、欧米列強は日本にどのような接触をしていたのかという外交を中心とした部分に着目してみます。

小学校と中学校では平成14年度からは、新学習指導要領に基づいた新しい教科書が使用されることになっています。今回の指導要領の改訂の目玉は、「総合的な学習の時間」の創設と、それに伴う学習内容の実に3割という大幅な削減にあります。そこで、それぞれの学校における扱われ方を、学習指導要領の該当部分を見た上で、実際の教科書での取り扱いを見ていきます。

まず、小学校です。小学校では初めて歴史的なことを学びますが、そのことについて新学習指導要領では、社会科の6学年の内容として、

我が国の歴史上の主な事象について、人物の働きや代表的な文化遺産を中心に遺跡や文化財、資料などを活用して調べ、歴史を学ぶ意味を考えるようにするとともに、自分たちの生活の歴史的背景、我が国の歴史や先人の働きについて理解と関心を深めるようにする。

と掲げられています。さらに幕末、明治維新时期の事については、「黒船の来航、明治維新、文明開化などについて調べ、廃藩置県や四民平等などの諸改革を行い、欧米の文化を取り入れつつ近代化を進めたことが分かること」が求められています。さらに「歴史的な事象を網羅的に扱わないこと」も求められているのです。人物についてはペリー、勝海舟、西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允、

明治天皇、福沢諭吉、大隈重信、板垣退助、伊藤博文といった人々がこの時代の人物として取り上げられています。人物の働きや代表的な文化遺産を中心に扱うことを目指している今回の小学校社会科の学習指導要領では、具体的に名前を挙げている歴史上の人物42人の中で、実に10人がこの時期の人々なのです。これは歴史学習の中でも、この時期を特に重点をおいて扱っていることを物語っています。

さて、では教科書の中での扱いはどのようになっているのでしょうか。平成14年度から群馬県内の小学校で使われる社会科の教科書は、すべて東京書籍の「新しい社会」です。ここではその教科書の中身を見てみます。この時期は「明治維新をつくりあげた人々」という章になっています。写真入りでペリーの紹介がなされ、浦賀上陸の様子も半ページを割いて写真を紹介しています。また西郷や木戸などによって討幕運動が大きくなったので、徳川慶喜が政権を朝廷に返したことが紹介されています。このように社会全体のダイナミックな動きよりは、人物について学ぶようになっています。外国との交渉はペリーの来航と日米和親条約の締結、岩倉使節団が出発したことなどが挙げられており、外圧と日本側の自発的な西洋研究を同列に取り上げています。

さて、続いて中学校の新学習指導要領です。社会科の歴史的分野では、その内容として掲げられていることの中で、注目すべき点があります。「近現代の日本と世界」の中の最初の2項目です。次に挙げてみましょう。

ア 市民革命や産業革命を経た欧米諸国のアジアへの進出を背景に、開国とその影響について理解させる。

イ 明治維新の経緯のあらましを理解させ、新政府の諸改革により近代国家の基礎が整えられたことに気付かせるとともに、人々の生活の大きな変化について考えさせる。

このように中学校では、開国の背景に外圧があることを学ぶのです。この取り扱いについて、「欧米諸国のアジアへの進出については、近代社会の成立の下、新たな市場や原料、植民地を求めてアジアにも進出したものであることを欧米諸国の事例を選んで取り上げるようにすること。ただし、これらは我が国の歴史を理解するための背景として取り扱うにとどめ、各事象の詳細にわたらないようにすること。」が求められています。また、「明治維新については、複雑な国際情勢の中で独立を保ち、近代国家を形成していった政府や人々の努力に気付かせるようにすること。」をも求めているのです。これらを見ると、中学校で学ぶことは、日本を中心にした歴史的な事象の学習が中心である事が分かります。欧米列強の動きは、背景として捉えるようになっています。

続いて実際の教科書ではどうでしょうか。県内の中学校で平成14年度からもっとも使われる東京書籍の教科書「新しい社会 歴史」を見てみます。ここでは「開国と不平等条約」という節の中で日米和親条約、日米修好通商条約が扱われ、それが日本経済に大きな影響を与えたことについてや、それにより武士や庶民は幕府に対する変換を強めていったことが書かれています。特にイギリスとの関係で見ると、この両方の条約をイギリスなど他の国と結んだとして登場します。さらに学習が進んでからイギリスが出てくるのは、薩摩藩がイギリスと結んで軍備を強化したとや、写真付きで下関砲台の占領を挙げられています。

「日本史」という授業が始まる高校での扱いを続けてみましょう。平成15年度からは高等学校も学習指導要領が改訂されます。その中での扱いを見ていきます。新学習指導要領の地理歴史の日本史Bでは、

「欧米諸国のアジアへの進出、学問・思想及び産業の新たな展開に着目して、幕藩体制の動揺と近代化の基盤の形成について理解させる。」

「開国、幕府の滅亡と新政府の成立からの明治時代の近代日本の歩みについて、アジアにおける国際環境と関連付けて考察させる。」

ということが内容としてあげられています。高校でも欧米列強のアジア進出が、幕府に動揺を加えたことについては扱うことを求めています。その動揺がどういった質のもので、どういう影響を与えたかについてまでは触れていません。また、明治維新の原動力の一つとして欧米の在日外交官の動きがあったことについても触れられてはいないのです。

高校の教科書の中では学習内容が豊富な山川出版社のものを見てみましょう。ここでも日米和親条約、日米修好通商条約に続いて、イギリスとの間でも同様の条約が結ばれたことは書かれています。高校になると「生麦事件」「薩英戦争」「四国艦隊下関砲撃事件」「改税約書」などの単語を学びます。イギリスのこととしては、公使であったパークスの名前が出てきており、彼が1866年当時、「幕府の国内統治力に疑問をいだき、対日貿易発展のために、天皇を中心とする薩摩藩などの雄藩連合政権の実現に期待をかけるようになった」と書かれています。一方幕府はフランス公使のロッシュに援助を受けていたことも書かれています。この次に検定を受ける教科書では、内容が厳選されてしまうため、こうした扱いもさらに概説化してしまうかもしれません。

2 条約交渉の経緯

1853年アメリカの東インド艦隊司令長官ペリーが4隻

の黒船を従えて、浦賀に來日したときから、日本の近代化への歩みが始まったと言ってよいでしょう。日本は外圧によって鎖国を開き、世界とのつながりが強化されていきました。ここではその開国したばかりの日本に、欧米列強がどのような接近をしていたのかを見ていきます。

初來日の翌年1854年、7隻の艦隊で現れたペリーは、その圧倒的な武力を見せつけた砲艦外交を行いました。そして3月には日米和親条約を調印し、下田と箱館の開港を取り付けたのです。8月にはイギリス東インド艦隊のスターリングと日英和親条約を結び、長崎と箱館の開港を幕府は認めました。その年は他にロシアとも日露和親条約を結んだので、あわせて3港を開港することになったのです。翌年にはオランダとも日蘭和親条約を結びました。日米和親条約によって來日したハリスと幕府との間で、通商に向けた交渉が繰り広げられました。そして大老に就任した井伊直弼によって1858年6月、朝廷の勅許をえられないままに、日米修好通商条約が締結されたのです。これに引き続いてオランダ、ロシア、イギリス、フランスの順に同様の通商条約が結ばれていきました。これが安政の五カ国条約と呼ばれるものです。1859年5月に來日した、イギリス駐日総領事のオールコックをはじめ、八月にはフランスの総領事ベルクールも來日して、いよいよ日本を舞台にした本格的な外交が始っていったのです。

当初各国の対日交渉は、条約を結んだ幕府との間で行われていました。しかし、国内情勢を見ると、日米和親条約の時に老中だった阿部正弘が、慣例を破って朝廷に報告したことなどから、幕府の権力に対する諸大名の発言権が強まってきている時代でした。こうした中で各国の公使は、交渉相手として幕府は本当にふさわしいのか、また条約を履行出来るだけの力を備えているのか、それを見極める必要があることに気付いてきたのです。

イギリスはこうした環境の中で、サトウたち公使館員やグラバーなどの商人の情報によって、幕府の権力が弱りつつあることや、逆に攘夷不可能を知った西南雄藩が力を持ちつつあることを知ったのです。それに加え、西南雄藩も外国との通商に熱い希望を持っていることを感じ取ったのでした。こうしたことが明治維新後の明治政府と、イギリス政府との強いつながりを築く礎になっていったのです。

III アーネスト・サトウが大室に來たわけ

1 どうして知ったのか・なにを見たのか

群馬県勢多郡西大室村（現群馬県前橋市西大室町）に大室古墳群があります。ここには前二子、中二子、後二子古墳をはじめ、いくつかの古墳が集まっていて、現在国指定史跡になっています。1878年（明治11）3月、こ

の中の中二子、前二子の両古墳が発掘されました。これらの古墳は当時、豊城入彦命や御諸分命の墓ではないかと言われていました。そのため、発掘の報告は宮内省に届けられました。このことは5月27日の東京日々新聞にも報道されています。発掘されたときの様子を、群馬県令だった揖取素彦から宮内卿の徳大寺実則にあてた報告から見てみましょう。

本年三月村民南北二陵上ニ於テ狐貉ノ巢穴ヲ穿テ偶然石窟ヲ掘出セリ

とあります。つまりキツネ、ムジナの巢穴を掘っていたら偶然見つかった、偶然の発見であると報告されているのです。しかし、西大室に住んでいた井上真弓から菅政友にあてた手紙の中では、

村吏県の許可を得て二月下旬彼山を開発せむとす。時に参集するもの又増して毎日数百人。三月廿一より四月一日まで三山を開発す。

とあります。県令が宮内省に送った報告とは違う発掘の様子が見えてきます。これによるとこの古墳の発掘は偶然と言うより、かなり計画的に行われたものだったことが見えてきそうです。

1871年（明治4）2月に、后妃、皇子、皇女などの墓の存在の調査を促すために、各府藩県管内に「太政官布告」が出されました。これを一つのきっかけとして、天皇陵などの陵墓の決定に向けて、明治政府による調査が全国で行われました。これを受けた前橋藩では同じ年の6月に、これにこたえるために、総社二子山の取調書が作成されました。この取調書の中では「太政官布告」が陵墓として要求する、図面・石碑・祭日・守護・古文書といったものを総社二子山古墳が満たしていることが報告されました。そして、総社二子山は豊城入彦命の墓であると、前橋藩の見解を伝えたのです。そして明治8年3月、管理人が置かれ、明治9年3月には「官有地第一種山稜之部」に編入されたのです。しかし、地元で起こったトラブルなどが原因になって、総社二子山古墳は陵墓としての管理を解かれました。一度決まった豊城入彦命の墓はどこなのか、決まった場所はなくなってしまったのです。こうして豊城入彦命の墓は本当はどこなのか探されている中で、西大室の古墳は発掘されたのです。

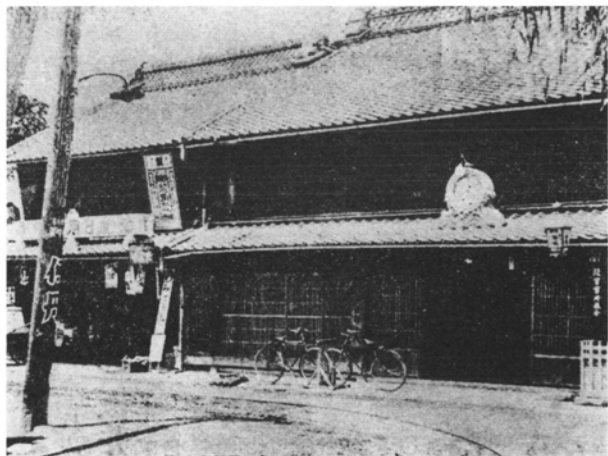
サトウが大室を訪れるのは、発掘から2年経った1880年（明治13）の3月のはじめです。サトウは発掘調査や出土品の具体的な情報を、親しくなっていた群馬在住の知人から知ったのです。ここでは『日本旅行日記』の中から該当部分を抜き出し、当時の様子を見ていきます。

3月6日

加藤竹斎という画家と私の従者ととともに江戸を発ち、熊谷から三里二十九町の中瀬で宿をとった。宿の主人は大変礼儀正しい。

3月7日

十二時二十分前に前橋に着き裏手から赤城山がよく見える油屋という旅宿に立ち寄った。若狭の小浜出身の太って小柄な沖という県役人が訪ねてきた。その人とは九年まえから知り合いだ。その後長谷川清美という名の書記が私を古墳のある大室まで連れて行く任務を受けてやって来た。徒歩で出発した。今日はよく晴れた暑い日だった。村の役人が道案内に現れ、土地の住人がかたまってじっと見守っていた。大屋にある産泰神社は木花咲耶毘売命を祀っており、本殿の中には優れた彫刻がある。この建物はすべて屋根を厚く葺いており、裏手には巨大な岩塊が転がっていたがおそらくこれが神社発祥の由来であろう。鯉登真道という名の神官が神社の南方に近いある古墳から出た埴輪類をいくつか持っていたが、中でも最も興味深いのは帽子を被った人間の大きな胸像だ。更に歩いてその種のものを保管してある根岸重次郎の家まで向かった。この男は村の庶務掛である。一通り目を通してから古墳へ行ってみた。全部で三つあるうち二つは既に開口されていた。たくさん静粛な見物人が群がり二人の警官がいる。宿に戻って夕食をとったがそこでは大いに話がはずみ何もしないまま床についた。



明治43年当時の油屋旅館 サトウもここに立ち寄った
(『写真集 明治大正昭和 前橋』より)

3月8日

絵をスケッチしたり、測定したり、みがいたりして一日を過ごし、私のノートブックはスケッチでいっぱいになった。その後鯉登のコレクションを見に出かけた。

3月9日

鈴木某という医者が近くの上武士で発掘した古い品物

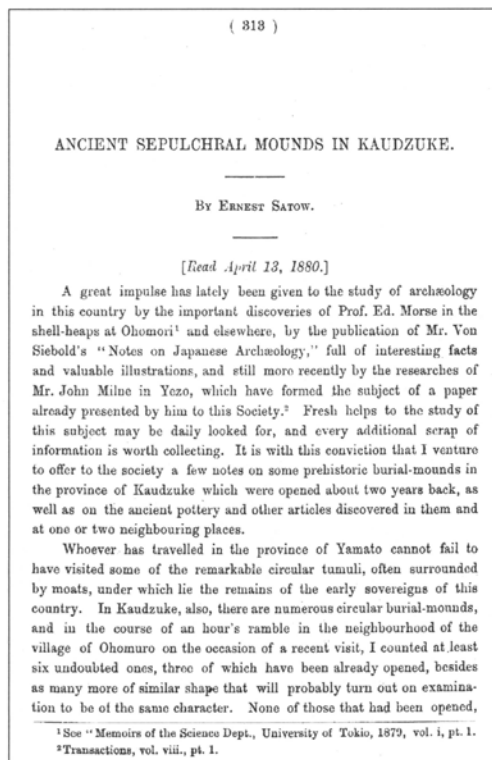
を一つ二つ持っているというので、彼の住む保泉村を経由して帰りの道についた。熊谷の近くにあるきさらぎ茶屋で遅い昼飯を食べ更に先へ進み、鴻ノ巣にある塚本という良好な旅籠に宿をとった。

3月10日

早朝出発し十一時には板橋について昼食をとり、その後古墳があるといわれている白山権現に立ち寄った。しかし塚はあったが墓らしき様子には見えなかった。掘ってみなければわからない。最後の三日間は神経痛に悩まされた。

忙しい公使館員としての仕事の合間をぬって、東京から4泊5日をかけて前橋の大室を訪れたのです。旅行中の日記の記載はとても短いのですが、ここからはサトウの旅の概要をつかむことが出来ます。

サトウは大室で調査してからおよそ1ヶ月が過ぎた、1880年4月13日に日本アジア協会においてその模様を講演しています。その時の講演内容は紀要の vol.8 part3に「上野地方の古墳群」(Ancient Sepulchral Mounds in Kaudzuke)として収録されました。



「日本アジア協会紀要」vol.8に掲載されたサトウの論文

2 何を考えたのか

この紀要に掲載されている論文は英文ですが、加部二生氏の「アーネスト・サトウ著「上野地方の古墳群」の学史的位置」の中で翻訳されていますので、これを通してサトウが発表した内容を見ていきましょう。



Fig. 1



Fig. 2

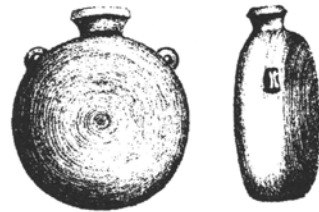


Fig. 3 SIDEVIEW OF Fig. 3



Fig. 4



Fig. 5



Fig. 6



Fig. 18

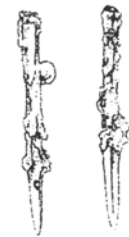


Fig. 17 Fig. 16



Fig. 15



Fig. 14

「上野地方の古墳群」のイラスト(1)



Fig.19

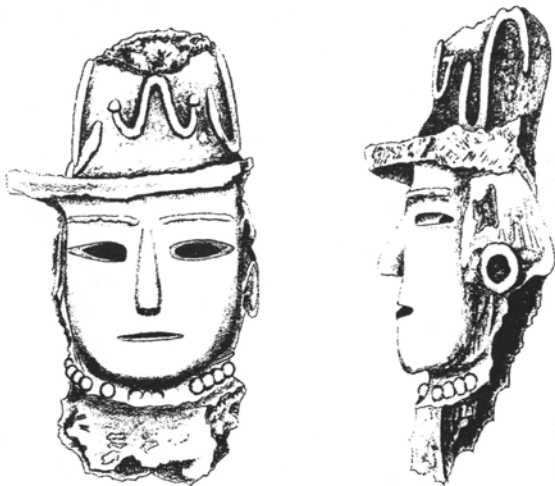


Fig.36

「上野地方の古墳群」のイラスト(2)

まず、文頭でエドワード・モースやフォン・シーボルト、ジョン・ミルンたちによる、日本の考古学についての先行論文を挙げ「これらの課題は従来の研究に新しい指針を与えるもので、次々発表される断片的な資料を蓄積することにより、この国の歴史が見えてくるといえる。本稿でとりあげる、約2年まえに発掘された上野地方の古墳や、付近の出土遺物について報告することも、こうした確信に基づいている」と述べて、サトウが大室の古墳の報告で目指した方向が語られます。

続いて大室村の散策では「6基の確実な古墳と、おそらく古墳と思われる塚を6ヶ所確認」していると、周辺的环境について語っています。そして前方後円墳の形や大室の各古墳の詳しい大きさを報告しています。また「絵をスケッチしたり、測定したり、みがいたりして一日を過ごし」た成果として、34点の遺物の重さ、大きさなどを発表しています。これらは前二子古墳の出土遺物だったようです。またこの時のスケッチが清書されたものも日本アジア協会の紀要には掲載されました。さらに友人に頼んで、ガラス小玉やベンガラを化学分析にかけた成果も報告もしています。

こうした客観的な事実が語られた後、これらの古墳に埋葬された人物について考察がされていきます。サトウは「日本書紀」に注目します。この中で崇神天皇が、二人の息子が見た夢をもとに、皇位をどちらに継がせるか、占ったという話があります。その夢の中で、兄である豊城入彦命は武器を使ったために東国経営に向かい、弟が皇位を継ぐことになったことに注目したのです。

そして豊城入彦命の子孫の御室別皇子が埋葬されたのが中二子古墳であるという地方伝説が確かであるとするならば前二子古墳が「おそらく豊城入彦命の墓であろうという日本の考古学者の推測は容認の価値があると」考えたのです。

しかし一方で「私は、日本の年代の正しさを支持することは出来ない。こうした古墳の正しい年代観は、考古学者によって決定されねばなるまい」とも報告しています。歴史を見ていくには、文献だけではなく、考古学にも期待を寄せているのです。

また埴輪の起源についても、殉死の問題と織りまぜて、「日本書紀」の中から考察しているのです。

こうした報告からは、サトウが実証主義的な考えに立って書かれていることが見えてきます。サトウは大室において、積極的にフィールドワークを行い、実物に触れています。そして堪能な日本語を活かして、当時まだ英訳されていなかった「日本書紀」を読みこなし、その中から大室の古墳の起源や埴輪の由来などを抽出したのです。こうした総合的な研究によって、大室の前二子古墳が豊城入彦命の墓であると評価していったのです。

3 大室で何が知りたかったのか

サトウは大室の前二子古墳を豊城入彦命の墓として認めることで、「日本書紀」の内容の信憑性について考えようという思惑があったようです。「古事記」や「日本書紀」では、神武天皇の登場から神話でなくなり、歴史が始まります。しかし、サトウは「古事記」や「日本書紀」の「記述に従うにしてもその趣旨は日本の歴史的事実を理解する上で便利であるからでしかないのであって、かの太陽の女神と須佐之男命の両者を歴史上の人物として把握してもよいように考えられる」と述べているのです。つまり天照大神や須佐之男命のモデルになった人物が実在した可能性を認めているのです。

しかし一方で「今日の日本人のいうところによれば、現存する記録類は歴史開始時よりもかなり後代になってから作成されたもので、歴史は神武天皇が即位した西暦前660年にはじまるとしている。ところが著名な年代記における四世紀末までの歴史は明らかに架空であり、最も初期の実録でもせいぜい八世紀の初頭のものである。しかし先述のように日本人にとっては神話も歴史も区別がなく、この問題を研究している西欧の多くの著述家ですら考えられない年代や信じられない伝説、そしてその他のつじつまのあわない矛盾を疑いのない真実として固く認めている」と当時の人々の歴史に対する年代観については疑問を投げかけているのです。

サトウは「日本書紀」をこうして資料批判をした上で、その資料の価値を認め、それを明らかにするために、関係のある場所に赴いているのです。サトウの前二子古墳の調査の手法は、現在の考古学に深く通じていますが、サトウの目指したものは、文献を通して天皇を見ていく日本の歴史研究でした。

IV アーネスト・サトウの日本研究

1 イギリス外交と『英国策論』の影響

アーネスト・サトウは1866年（慶応2）3月から5月にかけて、「ジャパン タイムズ」(Japan Times) という新聞に、3回に分けて文章を寄せています。この新聞は、当時横浜の外国人居留地で読まれていたものです。この文章にはサトウの名前は書かれていませんでした。しかし、その後翻訳されたものが出回った時には、「英国策論」とタイトルが付けられ、「英国士官ストウ著」と、著者名もつけられていたのです。この「英国策論」によって、サトウは西南雄藩や倒幕の志士に、同志として認識されました。宇和島藩を訪れた折には、前藩主の伊達宗城に「英国策論」を読んだことを伝えられているのです。

さて、では「英国策論」の中でサトウはどのような主張をしているのでしょうか。ジャパン・タイムズに載った原文と、和訳された「英国策論」から見てみましょう。

We must give up the worn-out pretense of acknowledging the Tycoon to be sole ruler of Japan, and take into consideration the existence of the other co-ordinate powers.

「今我レ大君ハ日本ノ君主ト言シ偽リヲ知レリ其故ハ外ニモ彼ト権勢ノ同キ者数多アルヲ以テ也」

ここでサトウは大君つまり将軍を、一大名として見ることで、大君が日本の君主であるということを否定しようとしていたのです。

このように、倒幕を目指す西南雄藩にとって、サトウの書いた「英国策論」は、とても魅力的なものでした。「英国策論」という名前からもわかるとおり、これが市中に出回ったときには、イギリス公使館を代表する意見として、勤王・佐幕の両側から思われました。

『遠い崖』で萩原延壽氏が指摘しているとおり、この論文を書く数ヶ月前には、サトウのところに多くの人が訪ねていました。「訪問者の多くは大名の家来であった。わたしはかれらのはなしから、外国人は将軍を日本の元首と見なすべきではなく、いずれ天皇との直接の関係をもつようにならなければならない、という確信を日ごとにつよめた。これらの人々を通して入手した公文書の写しからみても、将軍自身が、自分は天皇の第一の家臣以上の何者でもないとかんがえていることは、あきらかであった。」と日記に書いていて、サトウが討幕派の人々と深く関わり合っていたことが表れています。

この論文が掲載されたときに、署名がなかったことは、英国領事館員であるという身分を、サトウが隠しておきたい理由があったからではないかと思われます。それはサトウがこの論文の中で語る意見と、当時のイギリス公使館を代表する意見、つまり公使であるパークスの意見には大きな違いがあったからです。このことはサトウも分かっていたようですが、「そんなことは、もちろん私の関知するところではなかった」と、当時の心境を振り返っています。さて、では当時のパークスの意見とはどのようなものだったのでしょうか。「英国策論」が掲載されるおよそ一月前の、1866年2月28日付で、パークスがイギリスにいるハモンド外相へ送った半公信に、その意見がよく表れています。

「現在、将軍はわれわれにたいして誠意をもって行動しているとわたしは思う。その理由は、おそらく、こうである。将軍は大名たちと対立関係にあり、さらに、天皇を味方につける努力もしなければならないが、それを考えると、諸外国のあいだに友人をもつこと、すくなくとも敵をもたないこと、その利点を将軍が知っているからである。」

「さらに、わたしは、大名たちを通してよりも、将軍を通して、はるかに多くのことを成就できると考えている。

大名たちの力は、彼らが広範な協力関係を結ぶ場合にのみ巨大であるが、相互のあいだの嫉妬心と不和のために、その実現は容易ではない。」この半公信からは、この当時パークスは西南雄藩よりは幕府への期待が大きかったことが見えてくるのです。

サトウは「英国策論」がイギリス公使館の意見であると、世間ではき違えられていることに対して、上司パークスの耳には入らなかったようだと言っています。また、その一方で「1868年の初めに樹立された新政府とイギリス公使館との関係に、その影響がないでもなかったことは十分に想像されよう。同時に、大君の政府が存続していた間は、政府が多かれ少なかれ「疑惑」の目をもって私たちを見ていたことは、疑いもない事実」であったとも振り返っています。サトウは、自分の書いた文章の意見が上司の意見とは違うことを分かっているが、自分が日本人の友人知人を通して集めた情報に基づいて、正しいことを強く信じていました。また、結果としてイギリス政府が明治新政府との間で、より良い関係を築けたことも自負していたようです。一方、こうした意見を持つサトウの有能さを見抜いて、重用していく上司としての能力を、パークスにも評価するべきでしょう。

一方、フランス公使であったロッシュは、徳川慶喜の能力を高く買い、あくまで、幕府を中心とした体制を強化していこうと、心を砕いていました。ロッシュがこうした行動を取るようになった原因としては、サトウのように日本語を巧みに操って、勤王・佐幕両方の意見を聞き、分析できるような部下を持てなかったことが挙げられます。

ちなみにイギリス公使館で様々な政局観察がなされている中の1866年3月7日、薩長連合ができました。

2 神道研究

サトウの言論活動は主に日本アジア協会において行われていました。1872年（明治5）から1899年（明治32）の間に、サトウの論文は、22本も日本アジア協会紀要に納められています。それは多くの分野を対象とした研究の成果であり、サトウの日本研究の幅の広さ、奥行きを深さを物語っています。この中には2本の神道研究の論文が含まれています。一つは1874年（明治7）に口頭発表した「伊勢神宮」(The Shinto Temples of Ise)、もう一つは「純粹神道の復活」(The Revival of Pure Shinto)です。「伊勢神宮」の中では、内宮、外宮の由来、場所、建物の解説の他、「大祓」など神道自体についても多少触れています。この発表の後、この発表を聞いていた日本アジア協会会員による神道への様々な発言があったようです。サトウはこれに応えるべく翌年一つの論文を仕上げました。それが2本目の論文「純粹神道の復活」です。これは98ページにも及ぶ大作です。この中でサト

アーネスト・サトウの「日本アジア協会紀要」(The Transactions of the Asiatic Society of Japan) 掲載の論文

	掲載年	タ イ ト ル	
1	1874	'Notes on Loochoo'	「琉球の覚え書き」
2		'The Geography of Japan'	「日本地理」
3		'The Shinto Temples of Ise'	「伊勢の神宮」
4	1875	'The Revival of Pure Shinto'	「純粹神道の復活」
5	1878	'Observations upon the Causes Which Led to the Downfall of the Christian Mission in Japan'	「日本におけるキリスト教布教の急激な没落の原因の観察」
6		'The Introduction of Tobacco into Japan'	「日本への煙草の導入」
7		'The Korean Potters in Satsuma'	「薩摩での朝鮮陶工」
8		'The Use of the Fire-Drill in Japan'	「日本での火鑽臼の使用」
9		'Notes of a Visit to Hachijo in 1878'	「1878年の八丈島訪問の覚え書き」
10		'The Climate of Japan by Dr. J. J. Rein, Professor of Geography at the University of Marburg, Germany'	「日本の気候 J. J. Rein 博士（ドイツ・マールブルク大学地理学教授）の翻訳」
11	1879	'Ancient Japanese Rituals'	「古代日本の儀式」
12		'Vicissitudes of the Church at Yamaguchi from 1550 to 1586'	「1550年から1586年の山口での教会の移り変わり」
13		'On the Transliteration of the Japanese Syllabify'	「音訳する上での日本語の音節」
14		'Ancient Japanese Rituals.—Part II. (N0s2,3and4)'	「古代日本の儀式2」
15	1880	'Reply to Dr. Edkins on "Chi" and "Tsu"'	「『チ』と『ツ』のディキンズ博士への返答」
16		'Ancient Sepulchral Mounds in Kaudzuke'	「上野地方の古墳群」
17	1881	'Ancient Japanese Rituals.—Part III. (N0s5,6,7,8&9)'	「古代日本の儀式3」
18	1882	'Notes on Dr. Edkins' Paper "A Chinese-Japanese Vocabulary of the Fifteenth Century"'	「エドキンス博士の論文『15世紀の中日用語』についての注釈」
19		'On the Early History of Printing in Japan'	「日本の出版の初期の歴史」
20		'Further Notes on Movable Types in Korea and Early Japanese Printed Books'	「韓国と古代日本の印刷本の活字の更なる覚え書き」
21	1885	'Notes on the Intercourse between Japan and Siam in the Seventeenth Century'	「17世紀の日本とシャムの交際の覚え書き」
22	1890	'The Origin of Spanish and Portuguese Rivalry in Japan'	「日本におけるスペイン、ポルトガル競争の起源」
23	1899	'The Jesuit Mission Press in Japan'	「耶蘇会士日本通信」
24		'The Cultivation of Bamboos in Japan'	「日本での竹栽培」

参考文献

横浜開港資料館 2001 『図説アーネスト・サトウ』 有隣堂
Edition Synapse 1998～2001 'Collected Works of Ernest Mason Satow'Part1,2 "Collected Works of Japanogists"
アーネスト・サトウ (坂田精一訳) 1960 『一外交官の見た明治維新』上下 岩波書店
B M アレン (庄田元男訳) 1999 『アーネスト・サトウ伝』 平凡社

ウは神道の由来、「古事記」、「日本書紀」などについて触れています。そして神道研究を盛んに行った国学者の契沖、荷田春満、賀茂真淵、本居宣長、平田篤胤などの経歴と著作、考え方などについて、正確な日本語能力を持って解説したのです。

これらの論文を書いた目的は「神道について近代の作家の学風によって考えられた意見をいくつか説明することなので、いずれが神道の本質なのかを決定しようとするものではない」としています。そして、「古記録の絶対真実性、不可思議、超自然を基礎としているような彼等の理論は信頼がおけない」とも語っています。神道の本質や起源は普通の歴史研究の基準で決めるべきだというのがサトウの意見だったのです。サトウの神道研究は、科学的な解釈によって神の国と言われてきた、日本の古代を明らかにしていく必要を説いたものでした。

3 国内旅行による風土と歴史の理解

1858年（安政5）の安政五カ国条約では、居留地から10里四方の「遊歩」以外は、外国人が日本内地へ旅行する自由が認められていませんでした。

これを不満として、欧米諸国の外交団は日本側との交渉を行っていきます。そしてようやく1874年（明治7）、「病氣療養」と「研究調査」という条件付きで、外国人の日本内地の旅行権を獲得したのです。こうして日本の奥深くまでわけいる外国人が増えていきました。

サトウはそれ以前から外交官という立場で、様々な機会に日本国内を公務で旅行していました。1回目の来日時の国内旅行のほとんどは、そうした公務による情報収集の旅でした。

2度目の来日以降の旅は、もちろん仕事に活かす意味もあったでしょうが、そればかりではなく、日本を理解するため、また余暇のために旅行を繰り返していたよう

です。

彼のこうした旅行で得た、風土や土地の歴史への認識は「伊勢神宮」(Shinto Temples of Ise)や「1878年の八丈島訪問の覚え書き」(Notes of a Visit to Hachijo in 1878)などのように、「日本アジア協会紀要」などで紹介されたものもありました。しかし、サトウのこうした旅行は、第1節でも述べた1881年に出版された『中部・北部日本旅行案内』(A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan)に集大成されました。

この本が出版されたとき、横浜の英字新聞では「ヘボン博士の『和英語林集成』が日本研究の基盤に位置するとすれば本書はまさにその頂点に立つ」と評価しています。さらに「本書は日本に関する百科事典といえよう。今後は本書を持たずに国内旅行に向かうことはないであろう。そんなことは富士山に裸足で登山するようなものだ」とも評価され、このガイドブックの評価がとても高かったことが分かります。この本を翻訳した庄田元男氏は「内容は各地の地理的案内にとどまらず当該区域の歴史と伝説や民話を豊かに加えて自然と人文の両面から地域を分析した「地誌」として有用な説明となっているとともに、さらに幕末から明治にかけての日本各地の変遷、すなわち例えば神仏分離と廃仏毀釈、武家社会の崩壊、新しい産業の勃興と近代化、新道・架橋の建設など交通事情の飛躍的發展一などが正確に描写され、現在から見て誠に貴重な歴史的資料として評価」しています。実際、数字の上から見ても「日本アジア協会紀要」の最初の10巻には146本の論文が収められていましたが、その内の25本が日本国内の紀行文でした。それが次の10巻になると107本の論文中、4本のみと激減してしまうのです。これはサトウの『中央部・北部日本旅行案内』が出たことの影響が大きかったことを物語るのかもしれませんが。

サトウは、日本を理解する手だてを、歴史書や政府から入ってくる情報だけに頼るものではありませんでした。自らの健脚を活かして、まだ外国人を見たこともない人々がほとんどだった、日本の奥地へ分け入ることによって求めていったのです。こうしたフィールドワークの積み重ねが、サトウの日本理解の横糸として働いていきました。そして、第2版ではその序論として、「神道」や「仏教」などサトウの神道研究や、歴史研究の成果が縦糸として加わりました。このガイドブックは、こうしたサトウの日本研究の縦糸と横糸が編み合わされた、日本理解の集大成と考えても良いものに仕上がっているのです。

4 サトウの周辺のジャパノロジスト

サトウのいたイギリス公使館はパークスの元で様々な日本研究が行われていました。当時の日本アジア協会の会員は、公使館員と牧師が中心であったこともこれを裏

付けています。サトウと並んで日本研究者（ジャパノロジスト）として有名なのはウィリアム・ジョージ・アストン（William George Aston）とバジル・ホール・チェンバレン（Basil Hall Chamberlain）が挙げられます。アストンはサトウと同様に公使館に通訳官として勤務していて、「日本書紀」の英訳で知られています。一方のチェンバレンは来日後、お雇い外国人として、海軍兵学寮に語学教師として入り、帝国大学文科大学の博言学、日本語学の教授となった人です。彼は「古事記」を英訳し、また、『日本事物誌』(Things Japanese)の作者としても知られています。この本はサトウの『中央部・北部日本旅行案内』が質的に発展したものです。それというのも、サトウのガイドブックは、サトウが日本を去ってしまったため、第3版以降はチェンバレンに引き継がれたのです。チェンバレンはこのガイドブックの序論を『日本事物誌』として「話題」の案内書に仕立てました。そしてガイドブックは『日本旅行案内』(A Handbook for Travellers in Japan)として「場所」の案内書へと発展させていったのです。

こうした人々が中心となって、日本の理解を促すために横浜で始まった日本アジア協会による、居留地の人々への啓蒙活動は、活動場所を東京に移すころから、より純粋に日本理解のための研究がなされるように変化していったそうです。こうした人々を総称して、ジャパノロジストという言葉が確立しているのです。



バジル・ホール・チェンバレン（横浜開港資料館蔵）

V 教材化に向けて

1 サトウの教材としての価値

平成14年度から小中学校では新学習指導要領に基づく授業が始まります。その中で特に注目されているのは「総合的な学習の時間」であることは、前にも触れました。この時間の中、各学校では「例えば国際理解、情報、環境、福祉・健康などの横断的・総合的な課題、児童の興味・関心に基づく課題、地域や学校の特色に応じた課題などについて、学校の実態に応じた学習活動を行うものとする」ことを小学校、中学校の学習指導要領では求められています。

その中でも、国際理解については、小学校から英語の授業をするのかといった議論にまで発展しました。もちろん AET (英語指導助手) を交えて、英語に直接触れていくことも大切な国際理解のための体験になるでしょう。しかし、私たちが国際社会に飛び出したときに求められる国際理解とは、語学力だけでしょうか。それだけではなく、私たちが日本人として、自分の言葉で自分たちの国の歴史や文化を語ることこそが求められていることは、周知の事実でしょう。私たちが郷土の学習を大事にしないといけないことは、国際理解をしていく、その土台としての役割もあるのです。

では、私たちはどういった見方で、私たちの郷土について学ばべきでしょうか。外国人が外国を理解しようとしたときには、どういった見方で、文化や歴史を学び理解しようとしているのでしょうか。私たちもそうした理解の仕方を知っておくことが大切でしょう。そこでサトウが大室を通して理解しようとした、歴史認識の方法が大きな参考になるのです。私たちの郷土をフィールドに、その方法を実践しているのですから、サトウが見たかったものについて私たちはすでに郷土の一部としての親しみがあります。また、学習の場に設定しようとしたときに、郷土という行きやすい行動圏内にあるということも、魅力的です。それにも増して、郷土の理解につながり、郷土を愛する心を育むことにもつながっていくということは、最近の状況からは大切なことになってきているでしょう。このようにサトウの方法を学ぶことによって、私たちもグローバル・スタンダードな郷土理解を体験し、国際理解へと広がっていくのです。

2 教材としての活用

サトウの大室訪問を通して、授業を行おうとした場合、小中高校によって、その教材としての活用の仕方は変えていく必要があります。ここでは小中高校ごとに、どういった学習活動が、サトウの理解につながっていくのかを具体的に提案していきます。

小学校においては、特に実物に触れるという、体験学習を中心に据えることが、サトウに近づくための第一歩

になります。そこでまずは遠足などでサトウの訪れた大室を訪れてみるのが大切です。現在、大室古墳群は大室公園としての整備が進められている途中ですが、それぞれの古墳については、その外観を見ることが出来ます。また、中二子、後二子古墳には埴輪が並べられています。そこでサトウと同じように、古墳の外観や、並んで立っている埴輪をスケッチしながら、その特徴を観察することができます。その観察の観点が大切です。サトウと同様に正確に大きさなどを計ったりしながらその観察を行うのです。その上でどうしてそういう形なのか、こうした古墳や埴輪が必要なのかも想像するのです。こうした時にサトウも論文で引用した「日本書紀」に載っている、埴輪が作られるようになったエピソードを紹介するのも効果的な支援となるはずですが。総合的な学習としてこれらを展開すると、児童の学習の広がり、大室を中心にして多方面に広がっていき、郷土理解へとつながっていくでしょう。そしてさらに国際理解教育としての、自分たちの歴史、文化の学習へと発展していくことができると考えられます。

中学校ではさらに、サトウが訪れた前橋の油屋旅館から大室公園までを、サトウと同じように歩いてみます。歩く前にはサトウの日記を紹介して、サトウが東京からたどった4泊5日の旅をトレースしてみることが必要です。そして自分たちが歩くのはサトウの旅のほんの一部であることを理解しておかないと、大室までの道のりはただただ長いものになってしまいます。油屋旅館から大室公園まではおよそ12キロメートルの道のりです。日頃の生徒の徒歩による活動範囲の実体からすると、やや長い距離ですが、途中休憩を入れながら行っても、3時間半ほどで到着できます。

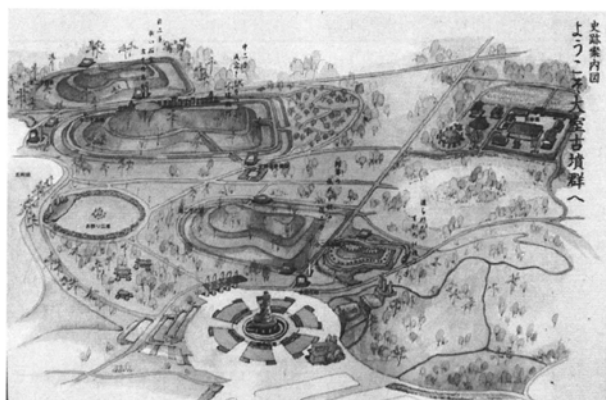
JR 前橋駅を8時30分に出発し、油屋旅館前を経由して、三俣から前橋大間々桐生線で大胡方面に向かいます。上泉からは、前橋赤堀線を赤堀方面に向かっていきます。途中で産泰神社を経由して大室を目指します。大室公園で昼食後、古墳群を観察します。帰りは路線バスを利用して、県庁前まで行き、前橋の中央公民館で大室で出土した遺物を見学します。1880年にこうした手間をかけて、東京から群馬まで日本の歴史を知るために訪れた外国人がいるということを、歩いていくという手間を通して体験します。こうしてよりサトウに近い旅を追体験することで、サトウの歴史理解へ向けた情熱の一端に触れることができるでしょう。このことは私たちが外国の文化を理解していくときに、かけなければならない手間はとて大きいことを体験できるはずですが。とにかく、文化の表面だけをなぞってその国を理解した気もしになりがちですが、その奥深さを知るためには、真摯な態度をもって取り組まなければならないということも気づかせてくれるはずですが。



前二子古墳



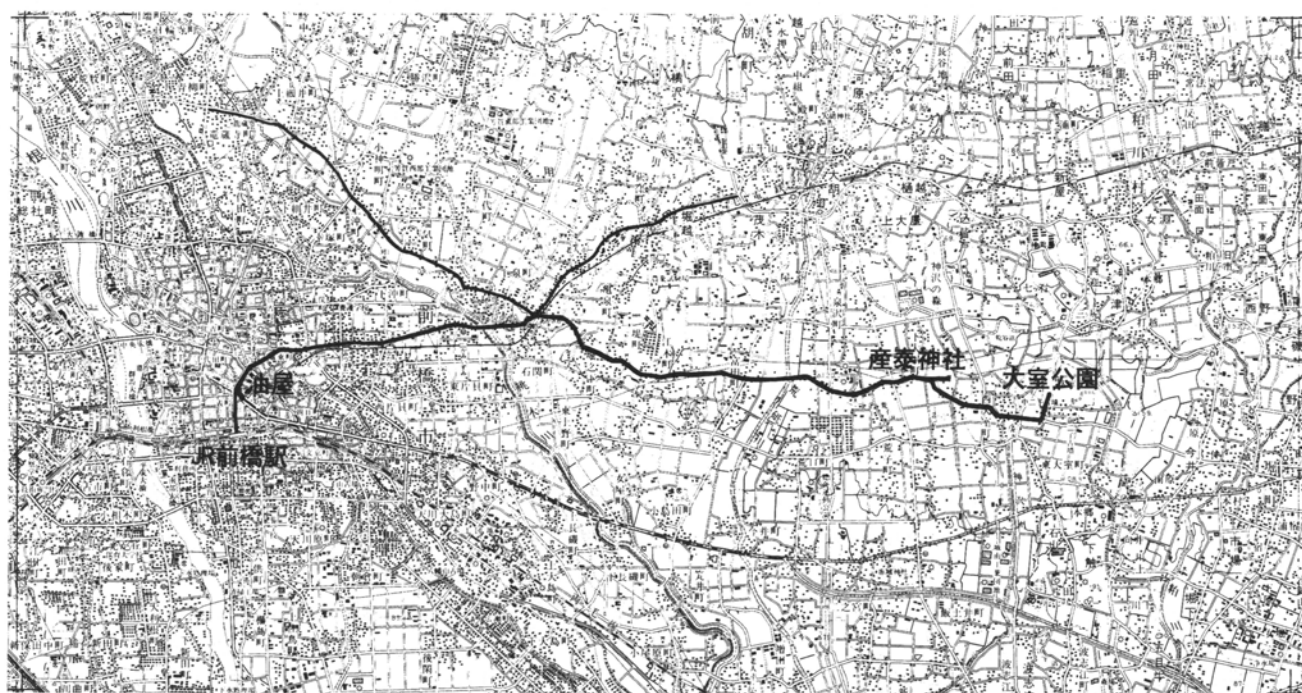
中二子古墳の周りに立っている埴輪群



大室古墳群の案内図



前二子古墳出土の土器（前橋中央公民館）



サトウが歩いた道をたどってみよう

(S = 1 : 50,000)

なお、この論文は平成12年度財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の職員自主研究活動の成果の一部です。

高校では、出来れば中学校のように歩いて前橋の町中から大室公園を訪れることもしたい所です。さらにこの事前学習として、サトウが大室を報告した「日本アジア協会紀要」の論文「上野地方の古墳群」について学ぶことも加えられます。全体を利用するには長すぎ、また専門性も高くなってしまうため、一部を利用します。それはサトウが「日本書紀」の記述を使いながら、大室の古墳に葬られた人物を考察していく場面です。専門的な言葉もこの中に多少含まれていますが、それらは註を付けておくことによって学習のつまずきを生むようなものにはならない範囲です。こうした論文を読むことは、生徒の英語読解力の自信につながります。さらに英文の論文の読解を通して、サトウの論理的な考察の進め方を学びながら、さらに様々な分野の学問を通して学際的に実証していく、異文化理解の方法も見えてくることでしょう。その論文の抜粋部分を最後にあげておきます。また、英語では取り扱わない論文の部分についても、国語の古文の時間などを通して、サトウの引用した古典に触れたり、現代文の時間でサトウの考えに迫ることが出来ます。こうした事前学習を踏まえた上で、大室を訪れたときには、サトウと同じ観察の仕方でも古墳群を観察し、理解を深めることにつながるでしょう。

小中高校それぞれの段階で、それぞれにあった材料を提供できるのが、サトウの大室を通しての歴史研究なのです。幕末に活躍した歴史上の人物が、私たちの郷土を通して日本の歴史を理解しようとしていました。こうした事実子どもたちが出会ったとき、子どもたちには郷土への誇りと、国際理解への道筋が見えてくることを願ってやみません。

おわりに

この中では、サトウという人物像に触れ、サトウの目指した異文化理解の方法について書いてきました。そして最後に、そうした見方を持った学習についての提案もさせていただきました。最近でも国同士で互いの文化や歴史を尊重をおろそかにしているために、多くの悲しい出来事が起こっています。私たちも自分たちの理解している日本を、そのまま世界に当てはめて考えていこうとすれば、そこに異文化である世界との軋轢が生まれてきてしまうことは目に見えています。こうしたときにサトウの日本研究の仕方は、多くの示唆を私たちに与えてくれるのです。そしてそれを教材として活用していくことは、今の教育が目指す生きる力を育むことに大いに役立つものとなるでしょう。

最後にアーネスト・サトウや当時の日本と西欧列強との関係について学ぶ、いくつかの参考図書や、インターネットサイトを、これを書くにあたって参考にした書物などと交えてご紹介します。

アーネスト・サトウについて学ぶためのホームページ

○横浜開港資料館

<http://www.kaikou.city.yokohama.jp/>

サトウの日記などサトウ研究の基礎資料がそろっている資料館です。

○「東洋の叢書」イギリス外交官アーネスト・サトウの生涯

<http://www02.u-page.so-net.ne.jp/wf6/piccolin/>

中学生がまとめたサトウ研究です。資料調査がしっかりされているページです。今後の発展が楽しみです。

アーネスト・サトウに近づくための本

この論文を書くに当たり、ここに挙げた本を参考、引用しました。

アーネスト・サトウ（坂田精一訳）1960 『一外交官の見た明治維新』 上下 岩波書店

1862年から1869年の間の1回目の滞日の時の様子を、晩年サトウが自分の日記を元に書いた本です。サトウの人物像を知る入門書です。

アーネスト・サトウ（庄田元男訳）1992 『日本旅行日記』 1、2 平凡社

サトウの日記の中で旅行中のものを集めたものです。サトウが旅行中何に興味を持ったかや、当時の日本の風景も見えてきます。

アーネスト・サトウ（庄田元男訳）1996 『明治日本旅行案内』 上中下 平凡社

「中部・北部日本旅行案内」(A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan)第2版の翻訳です。

E サトウ（長岡祥三訳）1989、1991 『アーネスト・サトウ公使日記』 I II 新人物往来社

1895年から1900年に及ぶサトウの駐日公使としての時代の日記を翻訳したものです。

アーネスト・サトウ 1991 「策論」『日本近代思想大系』 1 岩波書店

サトウの「英国策論」の全文と「The Japan Times」に掲載されたその原文を照らし合わせて見ることが出来ます。

萩原延壽 1998～2001 『遠い崖』 1～14 朝日新聞社

朝日新聞に連載されたサトウ研究の集大成です。サトウの日記を元に幕末、明治の日本が生き生きと描かれています。資料的価値はもちろんのこと、読み物としてもとても面白い作品です。

B M アレン（庄田元男訳）1999 『アーネスト・サトウ伝』 平凡社

サトウの死から間もない1933年に、サトウの遺言執行者に依頼されて、法学博士である伝記作家のアレンが、サトウの一生を時間を追って紹介しています。

横浜開港資料館 2001 『図説アーネスト・サトウ』 有隣堂

写真資料が多く、視覚的にサトウを捉えることが出来ます。またサトウについての様々なデータが良く集計されています。

唐沢定市 1984 「アーネスト・サトウ」『青い目の旅人たち』 みやま文庫

「上野地方の古墳群」の主要部分が翻訳されています。群馬県内の大きな図書館であれば手に取ることが出来ます。

A B ミットフォード（長岡祥三訳）1998 『英国外交官の見た幕末維新』 講談社

サトウの同僚だったミットフォードが晩年書いた回顧録です。彼はこの本を書くに当たってサトウの日記を借りたそうです。

B H チェンバレン（橋家重敏訳）1988 『チェンバレンの明治旅行案内』 新人物往来社

「日本旅行案内」の翻訳本です。「日本事物誌」とセットでチェンバレンの日本研究が見えてきます。

チェンバレン（高梨健吉訳）1969 『日本事物誌』 1、2 平凡社

「Things Japanese」の翻訳本です。アルファベット順に日本を知るための物事が並んでいます。

E S モース（近藤義郎・佐原真訳）1983 『大森貝塚』 岩波書店

1878年に「Shell Mounds of Omori」として発表された論文の翻訳本です。サトウの大室古墳の論文の冒頭で触れられています。

F ディキンズ（高梨健吉訳）『パークス伝』 平凡社

サトウの上司、イギリス公使のパークスの日本駐在中の伝記です。

J R ブラック（ねずまさし他訳）1970 『ヤング・ジャパン』 平凡社

1880年に出版された本の翻訳本です。サトウの時代に横浜で「ジャパン・ガゼット」という新聞を作った人物による当時の記録です。

イザベラ・バード（高梨健吉訳）『日本奥地紀行』 平凡社

1878年来日して、北海道、東北地方を旅しました。この旅行の時にサトウから日本についての情報をもらったことが書かれています。

オールコック（山口光朔訳）『大君の都』 上中下 岩波書店

絶版です。英国初代駐日総領事だった彼が帰国後記した日本滞在の記録です。豊富な挿絵が特徴です。

ハリス（坂田精一訳）1953 『日本滞在記』 上中下 岩波書店

絶版です。開国後初めて日本に赴任した外交官の下田での日々をつづった日記です。

ヒュー・コータツツィー・ゴードン・ダニエルズ（大山瑞代訳）1998 『英国と日本』 思文閣出版

イギリスの日本協会の創立100周年を記念して作られた本の翻訳本です。21人の日英の架橋となった人々を紹介しています。

ヒュースケン（青木枝朗訳）1989 『ヒュースケン日本日記』 岩波書店

ハリスとともに来日した彼は、日本人に殺害されてしまいました。殺害されるまでの彼の日本での日々がつづられています。

ヘルベルト・プルチョウ 1999 『「ニッポン通」の眼』 淡交社

この四世紀の間の異文化交流を27人の外国人の目を通して語っています。外国人の日本研究がどういふものか見えてきます

ローレンス・オリファント（岡田章雄訳）1968 『エルギン卿遣日使節録』 雄松堂出版

サトウが日本に来るきっかけとなった本の日本について書かれた部分の翻訳本です。

石井孝 『増訂明治維新の国際的環境』 吉川弘文館

現在本屋には並んでいませんが、サトウの時代の日本を取り巻く環境を調べるには必読の本です。

磯野直秀 1987 『モースその日その日 ある御雇教師と近代日本』 有隣堂

サトウが大室古墳の論文の冒頭で触れた、モースの発掘について書かれています。

市川清流（橋家重敏訳）1992 『幕末欧州見聞録』 新人物往来社

サトウが英訳して、海外に紹介した本「尾蠅政行漫録」の現代語訳本です。

加藤祐三 1999 『幕末開国と明治維新期の日英関係』『明治維新と西洋国際社会』 吉川弘文館

幕末から明治維新にかけて、日本とイギリスが外交を通して築いてきた親近感が分かります。

川崎晴朗 1988 『幕末の駐日外交官・領事官』 雄松堂出版

外交、領事関係の歴史とともに、幕末日本を舞台に活躍した外交官、領事官を年を追って整理してあります。

橋家重敏 1986 『ネズミはまだ生きている』 雄松堂出版

絶版です。チェンバレンについて多方面からの研究書です。面白い本のタイトルは彼の回想録の書名から付けられています。

橋家重敏 1998 『イギリス人ジャパノロジストの肖像』 日本図書刊行会

サトウの書誌学についての論文などサトウ、アストン、チェンバレンについて著者が書いた論文集です。

佐伯彰一 芳賀徹 1987 『外国人による日本論の名著』 中央公論社

1858年から1984年の間に外国人が書いた日本論42編が紹介されています。サトウの「一外交官の見た明治維新」も紹介されています。

杉山伸也 1993 『明治維新とイギリス商人』 岩波書店

商人として長崎で幕末の政情に大きな影響を与えたトマス・グラバーの生涯が描かれています。

田中彰 1993 『明治維新と天皇制』 吉川弘文館

「明治維新と世界史的環境」や「外国人の見た明治維新」など著者の論文集です。

鳴岩宗三 1997 『幕末日本とフランス外交』 創元社

ロッシュのフランス外交がどういったものだったのかを徳川慶喜との関係などを交えながら描かれています。

林望 1995 「愛書家サトウの面影」『ホルムヘッドの謎』 文藝春秋

日本で古書を買集めたサトウのエッセイです。

- 皆村武一 1998 『「ザ・タイムズ」に見る幕末維新』 中央公論社
 薩英戦争が起こったとき、英国議会ではその是非について多くの議論がありました。新聞を通してそれを見ていきます。
- 宮澤眞一 1997 『幕末に殺された男』 新潮社
 生麦事件で薩摩藩士によって殺害されたイギリス商人のリチャードソン研究の本です。この事件に触れた来日間もないサトウが「不安な気持ちを隠せなかったはずだ」と考察しています。
- 宮永孝 2000 『日本とイギリス』 山川出版社
 日英の外交史や経済文化の交流を通して400年の間の両国の関係が書かれています。
- 横浜開港資料館・横浜居留地研究会 編 1996 『横浜居留地と異文化交流』 山川出版社
 19世紀後半から横浜は漁港から国際都市へと大きく変化します。そこで繰り広げられた事象の論文集です。

アーネスト・サトウを知るための論文

この論文を書くに当たり、ここに挙げた論文を参考にしました。

- 安藤義郎 1982 「日本学の祖アーネスト・サトウの生涯」『経済集志』 52(別号2) 日本大学経済学研究会
- 安藤義郎 1983 「アーネスト・サトウの「英国策論」」『経済集志』 53(別号2) 日本大学経済学研究会
- 安藤義郎 1984 「アーネスト・サトウの「琉球に関する覚え書」」『経済集志』 54(別号1・2) 日本大学経済学研究会
- 安藤義郎 1985 「アーネスト・サトウの神道研究 「純粋神道の復活」について」『日本大学経済学部研究紀要』一般教育・外国語・保健体育第2号 日本大学経済学部
- 安藤義郎 1987 「アーネスト・サトウの平田篤胤研究」『日本大学経済学部研究紀要』一般教育・外国語・保健体育 第5号 日本大学経済学部
- 安藤義郎 1988 「アーネスト・サトウの日本研究「薩摩における朝鮮陶工」」『日本大学経済学部研究紀要』一般教育・外国語・保健体育 第8号

日本大学経済学部

- 安藤義郎 1990 「アーネスト・サトウの日本研究「日本における印刷の歴史」」『日本大学経済学部研究紀要』一般教育・外国語・保健体育 第11号 日本大学経済学部
- 加藤祐三 2000 「幕末開国と明治維新期の日英関係」『日英交流史』 1 東京大学出版会
- 加部二生 1998 「アーネスト・サトウ著「上野地方の古墳群」の学史的位 置」『国立歴史民俗博物館研究報告』第76集
- 楠家重敏 1989～1994 「日本アジア協会の研究(1)～(7)」『武蔵野女子 大学紀要』第23号～第29号 武蔵野女子大学
- 楠家重敏 1990～1994 「日本アジア協会関係年譜・1874～1875, 1877, 1878～1879, 1880～1881, 1881～1882, 1883」『武蔵野英米文学』第22号 ～27号 武蔵野女子大学英米文学会
- 楠家重敏 1990～1992 「日本アジア協会のこと(1)～(7)」『明治村通信』 第240, 241, 251, 253, 254, 260号 明治村東京事務所
- 楠家重敏 1992 「日本アジア協会成立の諸問題」『国際関係研究』 国際 文化編第12巻第3号 日本大学国際関係学部国際関係研究所
- 楠家重敏 1995 「日本アジア協会の知的波及」『杏林大学外国語学部 紀 要』第7号 杏林大学外国語学部

明治期の大室古墳群について書かれたもの

- 斎藤忠 1979 『日本考古学資料集成』 2 吉川弘文館
- 斎藤忠 1980 『年表で見る日本の発掘・発見史』奈良時代～大正篇 NHK ブックス
- 斎藤忠 1993 『日本考古学史年表』 学生社
- 外池昇 1995 「豊城入彦命墓の指定運動」『日本古代の祭祀と仏教』 吉 川弘文館

"ANCIENT SEPULCHRAL MOUNDS IN KAUDZUKE."

By Ernest Satow.

In the "Catalogue of Families," there is abundant evidence to show that at a very early period an offshoot of the imperial family had received the eastern part of Japan for its appanage, and this house seems to have afterwards divided into two branches called Princes (kimi) of Kaudzuke and Shimotsuke, from which sprang many other families. The first ancestor of them all was Toyo-ki-iri hiko, elder brother of the Iku-me-iri hiko, who afterwards became Mikado, and is known in history as Suwi-nin Ten-wau. A legend narrated in the Ni-hon-gi tells how their father loved both in such equal measure that he could not decide which of them to make his heir, and he resolved therefore to let each tell him a dream, from which he would obtain auguries to guide his choice. The two princes, having received his instructions, bathed themselves and said their prayers, and then going to sleep dreamed each a dream. At daybreak the elder reported to his father that in his dream he had ascended a certain hill, and turning to the east, eight times brandished his spear and eight times dealt a blow with his sword. The younger then told his dream in turn. He had ascended the same hill, and spreading a rope on all sides of him, had hunted the sparrows that devoured the corn. From these two dreams it was naturally inferred that the gods intended the elder to be governor of the Eastern Provinces and the younger to be monarch of the whole empire. The latter was therefore recognized as heir to the throne, and the former appointed ruler of the Eastern Provinces. These events took place in the 48th year of Su-zhin Ten-wau, which, according to popular chronology, corresponds to the year 50 B.C., but this date cannot be accepted with any more confidence than, let us say, the year 1184 B. C. for the fall of Troy. The son of Toyo-ki-iri hiko was Ya-tsuna-da, who was in turn succeeded in the governorship of the east by his son Hiko-sa-shima no miko, but the latter died on the way, just after setting out from the capital to take possession of his office. The Easterners (some of whom may perhaps have come up to Yamato to meet him) secretly carried off his body and buried it in the province of Kaudzuke. The Ni-hon-gi (from which these notices are taken) goes on to say that Mi-moro-wake no miko, son of Hiko-sa-shima, was appointed in the following year to take his father's place. This event is ascribed to the 56th year of Kei-kau Ten-wau or 126 A.D., according to the same fabulous chronology, and it adds that "the descendants of this prince, who was a wise and benevolent ruler, exist in the eastern provinces to this day" (i.e. some time in the 8th century).

If it be admitted that the local tradition which identifies the central tumulus with the burial-place of Mi-moro-wake no miko is authentic, then the conjecture of Japanese archaeologists that the tumulus in which so much pottery was found is probably that of Toyo-ki-iri hiko, seems worthy of acceptance. On the west of Mahebash, at the village of Uhen, there was formerly a sepulchral mound said to be that of Toyo-ki-iri hiko, and in Vol. I. of the Kuwan-ko Dzu-setsu Mr. Ninagaha has figured a beautifully shaped vase found in it about the end of the 18th century. The ornamentation of this vase so closely resembles that of the pottery dug up at Ohomuro, that it is impossible not to conclude that the two mounds were constructed about the same period by people of the same race. The burial place of Hiko-sa-shima, whose body was carried off by the inhabitants of this

province, still remains to be discovered. The large number of sepulchral tumuli in this part of the province seems to indicate the site of a town of considerable size, and on the north of the village of Ohomuro in a commanding situation is a piece of ground, where it would not be unreasonable to suppose that the great man of the locality had a fortified residence. It is raised above the fields on the south, west and east sides, and surrounded entirely by what was once a moat. Even in those portions of the moat which have been converted into paddy-fields, the outer bank can still be traced with unbroken completeness. In adopting the view that these tumuli are really the burial places of the above-named heroes of antiquity, I do not at all mean to support the correctness of the Japanese dates, and the true age of the mounds must be determined by archaeologists who can give a well-based opinion as to the probable date of the pottery which they have been found to contain.

“ANCIENT SEPULCHRAL MOUNDS IN KAUDZUKE.” : 1880年3月、群馬を訪れたイギリス外交官アーネスト・サトウが書いた古墳調査の論文です。群馬を訪れた翌月「日本アジア協会」で発表しました。これはその一部を抜粋したものです。

Kaudzuke : 上野。群馬県の旧名です。

“Catalogue of Families,” : 『姓氏録』と原典には脚注されていますが『新撰姓氏録』のこと。814年（弘仁元）に成立しました。平安左右京、山城、大和、摂津、河内、和泉の1182の氏族の系譜が書かれています。30巻目録1巻で構成されていましたが、現存しているのは抄録本です。

two branches called Princes (kimi) of Kaudzuke and Shimotsuke : 上野君と下野君と呼ばれる2家。サトウは「こうずけ」と発音していたようですが、本当は「かみつけのきみ」という発音です。

Toyo-ki-iri hiko : 豊城入彦命

Iku-me-iri hiko : 活目尊

Suwi-nin Ten-wau : 垂仁天皇『古事記』『日本書紀』で第11代と伝えられる天皇です。

Ni-hon-gi : 『日本書紀』

the 48th year of Su-zhin Ten-wau : 崇神天皇の48年。平成14年のように元号が使われる前の年代表記です。

Ya-tsuna-da : 八綱田

Hiko-sa-shima no miko : 彦狭島王

Mi-moro-wake no miko : 御諸別王

Kei-kau Ten-wau : 景行天皇。『古事記』『日本書紀』で第12代と伝えられる天皇です。

On the west of Mahebash, at the village of Uhenō : 前橋の西、植野村。現在の前橋市総社町植野。ここにある総社二子山古墳が豊城入彦命の墓だと言われていました。

Kuwan-ko Dzu-setsu : 『観古図説』は蜷川式胤によってまとめられた図録です。陶芸の名著として知られています。

Mr. Ninagaha : 蜷川式胤（にながわのりたね）。1835～1882。明治の初期に活躍した考古学者です。国立博物館の設置などに尽力しました。東大寺の正倉院の宝物の学術調査をしたことでも知られています。

Ohomuro : 大室。群馬県前橋市西大室町にある大室古墳群のことです。

アーネスト・サトウの旅

西暦	和暦	旅行期間		日数	同 行 者	行 程						
1862	文久 2	9 / 8 初来日										
		12 / 2	12 / 13	12	ニール他	川崎	江戸	御殿山	愛宕山	王子	十二社の池	
1863	文久 3	8 / 6	8 / 21	16	パークス	鹿児島	薩英戦争					
1864	元治元	7 / 21	8 / 10	21	伊藤俊輔、井上聞多、他	姫島	伊美	竹田津	姫島			
		8 / 29	10 / 10	43	オールコック他、四カ国艦隊	姫島	下関海峡	田野浦	前田村砲台	門司	下関	
1865	慶応元	10 / 2	10 / 22	21	パークス	箱館	宿野辺	落部	箱館			
		11 / 1	11 / 27	27	パークス	兵庫	神戸	摩耶山	大坂	市岡新田	春日出新田	
						京橋	布引滝	岩屋村	摩耶山			
1866	慶応 2	12 / 12	1 / 16	36		長崎	鹿児島	集成館	宇和島	神野浦	兵庫	
1867	慶応 3	2 / 7	2 / 25	19	ミットフォード	兵庫	神戸	尼崎	大坂	住吉神社	心斎橋	
						兵庫	横浜					
		3 / 21	3 / 29	9	ロコック夫妻、マーシャル、アスピノール	横浜	熱海	伊豆山	石橋山	箱根	畑宿	
						小田原	平塚	戸塚				
		4 / 11	5 / 18	38	ミットフォード	大坂	大坂城					
		5 / 18	6 / 3	17	ワグマン	草津	土山	庄野	桑名	宮(熱田)	岡崎	
						吉田	浜松	掛川	島田	府中(静岡)	蒲原	
						三島	戸塚	江戸				
		7 / 23	8 / 22	31	パークス、ミットフォード	南部	箱館	新潟	佐渡・夷	相川	七尾	
						志雄	津幡	金沢	小松	金津	府中(武生)	
					中河内	長浜	武佐	草津	伏見	大坂		
		8 / 30	10 / 16	48	パークス	阿波	土佐	下関	長崎	江戸		
1868	明治元	11 / 30	2 / 16	79	ミットフォード	大坂	大坂城	兵庫	大坂			
		2 / 16	2 / 23	8	ウィリス	伏見	京都					
		3 / 21	3 / 31	11	パークス、他	京都	知恩院	御所				
1869	明治 2	1 / 5	1	パークス	江戸城							
		2 / 24	賜暇帰国									
1870	明治 3	11 /	賜暇帰国を終え来日									
1871	明治 4	8 / 22	8 / 31	10	アダムズ、ヒューブナー	藤沢	小田原	湯本	川端	畑	箱根	
						箱根神社	姥子	大涌谷	芦之湯	箱根峠	三島	
						山中	箱根	軽井沢	熱海	江ノ島	藤沢	
						境木	保土ヶ谷	神奈川				
		11 / 19	11 / 23	5	佐野、遠山、小次郎	板橋	膝折	大井	川越	松山	鴻巣	
1872	明治 5					桶川	上尾	大宮	浦和	蕨	板橋	
		1 / 17	1 / 25	9	アダムズ	八王子	駒木野	小仏峠	吉野	上野原	猿橋	
						大月	谷村	吉田	山中	小善地	宮ヶ瀬	
						煤ヶ谷	飯山	厚木	鶴間	長津田	二子	
		3 / 13	3 / 22	10	アダムズ、ワグマン	大沢	古河	宇都宮	今市	馬返	中禅寺	
						東照宮	小来川	古峰神社	石裂	口栗野	出流	
						葛生	佐野	館林	行田	桶川		
		7 / 12	7 / 14	3	ハネン、アトキンソン	金沢	横須賀	鎌倉	戸塚	境木	横浜	
		9 / 3	9 / 6	4	ハネン	神奈川	戸塚	鎌倉	稲村ヶ崎	極楽寺	葛西谷	
						材木座	小坪	寿福寺	頼朝の墓	扇ヶ谷	若宮八幡	
					江ノ島	竜口寺	江ノ島	岩本院				
		11 / 29	1 / 14	46	大隈重信夫妻、山尾庸三夫妻、ボイル	横浜	下田	鳥羽	古市	伊勢神宮	的矢	
						大島	友ヶ島	明石	神戸	多度津	金比羅宮	
						御手洗	釣島	田野浦	下関	六連島	長崎	
						門司	小田	三田尻	宮市	山口	宮島	
						尾道	神戸	大阪	橋本	石清水八幡	京都	
1873	明治 6					大津	石山寺	草津	米原	長浜	磨針峠	
						関ヶ原	垂井	赤坂	岐阜	鶴沼	細久手	
						馬籠	妻籠	木曾福島	洗馬	塩尻	下諏訪	
						和田峠	笠取峠	岩村田	追分	軽井沢	横川	
						妙義山	松井田	安中	板鼻	高崎	深谷	
						熊谷	浦和	東京				
		4 / 11	4 / 16	6	ハネン夫妻	新宿	田無	小川	箱根ヶ崎	青梅	氷川	
						大菩薩峠	妻坂峠	上野原	吉野	小仏		

1873	明治 6	11/23	11/27	5	ハネン、アトキンソン	藤沢	一ノ宮	相模川	伊勢原	大山	阿夫利神社
						大山頂上	蓑毛	八町ノ台	布川	丹沢	山中
						山ノ丸付近	遠見場	大門坂	宮ヶ瀬	鳥屋	関
						長竹	根小屋	小倉	馬入川下り	厚木	
1874	明治 7	9/24	10/ 1	8	ヘイラー	幸手	宇都宮	大沢	日光	東照宮	華嚴の滝
						中禅寺湖	竜頭滝	戦場ヶ原	湯の滝	湯の湖	中禅寺
						日光	野木				
1875	明治 8	2/ 第 2 回目の賜暇帰国									
1876	明治 9	英国に滞在、暮れに日本に向け出発									
1877	明治10	1/26 34歳で 3 回目の来日									
		1/28	2/22	26	吉川（イギリス長崎領事館使用人）	長崎	茂木	阿久根	西方	川内	串木野
						市来	壺屋	伊集院	鹿児島	苗代川	重富
						加治木	横川	吉田	人吉	球磨川下り	八代
						口之津	茂木	長崎	神戸	大阪	横浜
		4/17	4/24	8		小川	箱根ヶ崎	二俣尾	小菅	大菩薩峠	塩山
						甲府	石和	勝沼	大月	八王子	府中
						新宿					
		1/10	8/ 1	36730	ディキンズ、ローレンス・チン	小田原	箱根ヶ崎	箱根峠	佐野	須山	富士山頂
		9/12	10/ 3	22	ディキンズ	熊谷	伊勢崎	前橋	伊香保	榛名神社	浅間山
						応桑	草津温泉	四万	中之条	伊香保	渋川
						溝呂木	赤城山	日影南郷	白根温泉	白根山	金精峠
						湯元	大真名子山	戦場ヶ原	中禅寺湖	日光	鹿沼
						古河	市川				
1878	明治11	2/10	2/10	1	ディキンズ	横須賀	浦賀				
		3/ 4	3/17	14	ディキンズ、ブラキストン	八丈島	八丈富士	三宅島			
		7/17	8/13	28	ホーズ	鴻巣	安中	碓氷峠	軽井沢	小諸	上田
						田沢	池田	大町	野口	針ノ木峠	黒部
						立山下	室堂	吉野	猪谷	船津	大坂峠
						高山	黍生谷	野麦	日和田	西野	木曽福島
						御嶽	木曽福島	松本	和田	軽井沢	熊谷
1879	明治12	5/ 4	5/ 4	1	チェンバレン、アトキンソン	本所	逆井	国府台			
		5/ 7	6/10	35		神戸	大阪	京都	奈良	三輪	長谷
						多武峠	上市	泥谷	高野山	熊野神社	新宮
						那智	吉野	上市	奈良	上野	上柘植
						石薬師	桑名	熱田	岡崎	浜松	掛川
						三島	横浜				
		7/26	7/27	2	ブライアー	江ノ島					
		10/18	10/25	8	井上喜久三郎	千住	松戸	小金	利根川下り	津宮	香取神宮
						伊能	成田	大綱	笠森	大多喜	小湊
						鋸山麓	金谷	浦賀水道	横浜		
		11/15	1/ 2	48	三田村敏行、アンダーソン	四日市	津	松坂	山田	伊勢神宮	長島
						尾鷲	林	勝浦	周参見	田辺	紀三井寺
						和歌山	槇尾	堺	大阪	京都	奈良
						大阪	神戸	京都	大津	彦根	宮
						瀬戸	多治見	飯田	松本	善光寺	上田
						小諸	畑	甲府	猿橋	高尾山	八王子
						府中					
1880	明治13	3/ 6	3/10	5	加藤竹斎	熊谷	中瀬	前橋	大屋	大室	伊勢崎
		3/21	3/21	1	チェンバレン、ホーズ	鴻巣	板橋	白山権現			
						弘法大師	梅屋敷				
		3/25	3/31	7	井上喜久三郎	金沢	鎌倉	長谷	稲村ヶ崎	江ノ島	小田原
						木賀	大地獄	木賀谷	小田原	平塚	横浜
		4/25	4/25	1	チェンバレン、ホーズ	矢ノ口	府中				
		5/ 2	5/ 2	1	チェンバレン、ホーズ	鶴見	神奈川				
		5/24	6/15	23		田無	飯能	大宮	志賀坂峠	十石峠	大日向
						板橋	清里	小諸	善光寺	戸隠神社	野尻
						赤倉温泉	妙高山	新井	柏崎	弥彦	新潟
						長岡	小千谷	六日町	三国峠	渋川	熊谷
		9/24	10/ 2	9	ケネディ代理公使、本間三郎	岩槻	古河	栃木	永野	足尾	庚申山
						足尾銅山	神子内	日光	裏見滝	中禅寺湖	日光
						今市	鹿沼	小山	野渡	中川	蠣殻町

1880	明治13	12/24	12/30	7	ホーズ	行徳	船橋	幕張	千葉	五井	久留里
						清澄	天津	江見	布良	館山	勝山
						浦賀	横須賀	横浜			
1881	明治14	1/15	1/17	3	ホーズ	浦賀	勝山	竹岡	木更津	姉ヶ崎	五井
						船橋	市川				
		4/3	4/8	6		川越	富岡	松井田	高崎		
		7/14	8/21	39	ホーズ	田無	氷川	丹波山	柳沢峠	西保	御岳
						黒平	木賊峠	長沢	権現岳	教来石	芝平峠
						高遠	伊那	飯田	小川路峠	和田	青崩峠
						秋葉神社	千頭	静岡	蒲原	白糸の滝	吉田口五合目
						須走	十里木	人穴	身延山	鰍沢	奈良田
						甲府	富士川下り	三島	箱根		
		11/1	11/17	17	英皇太子子息、ターンブル。アストン	神戸	京都	奈良	飛鳥	大阪	京都
		『中央部・北部日本旅行案内』初版 この年発行									
1882	明治15	2/23	3/1	8	2人の朝鮮人、本間三郎	小田原	早川	石橋	米神	赤沢山	根府川
						江之浦	吉浜	門川	稲村	熱海	網代
						松原	穴戸温泉	荻	十足	吉田	熱海
						日金山	湯本	小田原	藤沢		
		5/17	5/24	8	呉鑑	荻窪八丁	所沢	飯能	赤工	原市場	名郷
						妻坂峠	横瀬	秩父	賛川	栃木	雁坂峠
						釜川	恵林寺	差出	甲府	鰍沢	富士川下り
						南部	岩淵	吉原	沼津	箱根	湯本
						神奈川					
		8/9	9/6	29	パークス、その娘2人、ウィルキンソン、レヤード他	神戸	大阪	伊勢	名古屋	岩淵	三島
						箱根	湖尻	深良峠	須山	箱根山頂	須山
						深良峠	箱根	二子山	箱根	三島	吉原
						大宮	浅間神社	村山	馬返	富士山登頂	小田原
						横浜					
		11/18	11/30	13		栗橋	栃木	伊勢崎	沼田	中山	大岩
						白根登山	杓掛	碓氷峠	榛名神社	伊香保	水沢
				前橋	大間々	桐生	渡良瀬川				
1883	明治16	1月、3回目の賜暇のため帰国の途につく									
1884	明治17	1月にシャム総領事に任命される									
		10月、休暇を過ごすため1ヶ月来日									
		10/10	10/14	5	プランケット夫妻、ガビンズ他	宮ノ下	芦之湯	二子山	富士屋	木賀	富士屋
						乙女峠	仙石原	東京			
		11/8	11/15	8	ハネン	本庄	伊勢崎	大間々	足尾	赤倉	中禅寺湖
						日光	行者堂	女峰山	日光	宇都宮	古河
					幸手	岩槻	川口				
『中央部・北部日本旅行案内』第2版 この年発行											
1906	明治39	10月、北京からの帰国の途上来日									
		10月末	11月初		武田久吉	日光	中禅寺				

参考文献

萩原延壽 1998～2001 『遠い崖』 1～14 朝日新聞社
アーネスト・サトウ (坂田精一訳) 1960 『一外交官の見た明治維新』 上下 岩波書店
アーネスト・サトウ (庄田元男訳) 1992 『日本旅行日記』 1.2 平凡社
横浜開港資料館 2001 『図説アーネスト・サトウ』 有隣堂
B M アレン (庄田元男訳) 1999 『アーネスト・サトウ伝』 平凡社

アーネスト・サトウ関係年表

和暦	西暦	国内主要事項	外 交	サ ト ウ	考 古
天保14	1843			ロンドン、クラブトンに誕生(6/30)	
安政3	1856			ミル・ヒル・スクール入学	
安政5	1858		日米修好通商条約締結、日英修好通商条約締結(8)		尾張国東春日井郡神領村(現愛知県春日井市)で、銅鐸1口発見。
安政6	1859		オールコック来日、高輪東禅寺を仮公館に決定(6)	ロンドン、ユニバーシティカレッジへ進学	
万延元	1860	桜田門外の変(3)			
文久元	1861		水戸浪士、英国公使館を襲撃(7)	『エルギン卿遣日使節録』と出会う。日本領事館通訳生の辞令(8)。日本に向け出発(11)	丹波国桑田郡下弓削村(現京都府京北町)で銅鐸1口発見
文久2	1862	坂下門外の変(2)。和宮降嫁(公武合体)(3)。島津久光、幕政改革の意見書を奉呈。寺田屋騒動(5)。幕府、攘夷の勅使奉承を決定(12)	外国奉行竹内保徳、江戸・大坂開市、兵庫開港延期を申し入れるため渡英。オールコック一時帰国(3)、米国前公使ハリス帰国。英国公使館書記官(代理公使)ニール着任(5)、英国公使館守衛、公使館の英兵2名を殺害して自刃(6)、生麦事件(9)	北京で中国語学習(4～)。英国公使館通訳生として横浜着(9)	丹波国多紀郡篠山町右菅村(京都府篠山町)で古墳発見、鏡など出土(3)。宇都宮藩越前守戸田忠恕が山陵修復を幕府に献言、翌9月から行い、1865(慶應元年)10月終了した)
文久3	1863	将軍徳川家茂、京都に向け江戸を出発(3)。家茂、文久3年5月10日を攘夷の期限と定めることを奉答(6)。八月十八日の京都政変(9)。七卿落ち(10)	長州藩士12名、品川御殿山に建設中のイギリス公使館を焼く(1)、老中格小笠原長行、3港(横浜、長崎、函館)の閉鎖を諸外国代表に通告し、在留外国人の退去を要求、長州藩、攘夷の先鋒として、アメリカ商船を砲撃(6)、長州藩、フランス軍艦を砲撃、長州藩、オランダ軍艦を砲撃、長州藩、アメリカ軍艦ワイオミングと交戦して敗北、フランス東洋艦隊の2艦、下関の砲台を攻撃して守兵を掃蕩(7)、イギリス代理公使ニール、軍艦7隻とともに鹿児島に向け横浜を出発、薩英戦争(薩摩藩の砲台、イギリス軍艦と交戦し、砲戦翌日に及ぶ)(8)、フランス陸軍中尉カミュス、井戸が谷(武蔵国久良岐郡)で殺害される(8)(10)、薩摩藩、生麦事件の賠償金10万ドルを代理公使ニールに渡す(12)	英国代理公使ニールに従い、交渉補佐のため軍艦で鹿児島に向け随行(8)	伊賀国比土村(現三重県上野市)で銅鐸1口が発見された
元治元	1864	家茂、再び京都に向けて品川を出発(2)水戸藩の勤王攘夷派、筑波山にて挙兵(5)。池田屋騒動、井上聞多と伊藤俊輔の和平説、藩の会議で不採用となる(7)。蛤御門の変。長州藩主征討の朝命下る(8)	オールコック、帰着(3)、長州藩士、井上聞多、伊藤俊輔、滞英中に郷国の危急を知り帰国。横浜でオールコックに依頼し長州へ送ってもらう(7)。横浜鎖港談判使節池田長発ら、仏より帰国、鎖港の不可を幕府に進言、英仏米蘭4カ国艦隊、下関に向け出発(8)、4カ国連合艦隊、下関の諸砲台を陥落させる。長州藩、連合艦隊に和議を請い連合艦隊司令官キューパーと講和条約五ヶ条を協定(9)。若年寄酒井忠毗(タダマス)横浜で4カ国使臣と会見して、下関事件につき賠償金300万ドルの支払い、下関、瀬戸内海他の一港を開くことを約定(10)。英国陸軍ボールドウィンとバード、鎌倉八幡宮前で殺害される(11)。オールコック解任帰国。ボールドウィンとバードの殺害者、清水清次を処刑(12)。	オールコックに日本語習得を認められる(3)。井上聞多、伊藤俊輔と軍艦に同乗し、長州へ向かい、伊藤らと交友が生まれる(7)。下関砲撃のため軍艦で下関に向かう(8)。下関上陸部隊に従軍(9)。横浜操練場で日英両軍の合同演習を見る(10)	信濃国下川路邑(現長野県伊那市)の古墳付近で土中に1条の朱を発見。こ近くの老人は必ず異物があると考え、珠玉数千顆、銅鏡・銀環、刀剣、矛、鏃などが出土した
慶応元	1865	家茂、長州藩再征討のため、陸路江戸を出発(6)。幕府、攘夷の勅使奉承を決定、長州藩再征討のため諸藩に出兵を命令(12)	日本人がヴィクトリア女王の誕生日を祝して台場に英国旗をあげ、祝砲を撃つ(5)、パークス、横浜に着く(7)、パークス、ロッシュ、アメリカ代理公使ポートマン、オランダ総領事ファン・ボルスブルック、条約勅許と兵庫先期開港を要求するため、軍艦9隻を持って兵庫沖に至る、朝議、条約勅許、兵庫の先期開港不勅許に決定、幕府4カ国使臣に条約勅許、兵庫先期開港不勅許を告げ、下関賠償金の全額支払いと税則改訂を約束(11)	横浜領事館付「日本語通訳官」就任(4)。箱館へパークスの随行、アイヌの村で過ごす(10)。軍艦で兵庫沖へ行く。幕府の条約勅許、兵庫先期開港不勅許を翻訳(11)	

慶応2	1866	薩長同盟(3)。将軍家茂、大坂城で死去(8)。幕府、将軍の喪を理由に、長州征討軍の休兵を布告(10)。横浜大火(11)	幕府、英米仏蘭4カ国使臣と、輸入の改税約書を締結(6)。パークス、キング提督と鹿児島で薩摩藩の款待を受ける(7)。老中板倉勝静(カツキヨ)、ロッシュに軍艦、大小砲の購入斡旋を依頼(8)。パークス品川で暗殺未遂に会うが無事(12)	『ジャパン タイムズ』に「英国策論」の1回目掲載(3)。「英国策論」の3回目掲載(5)。横浜大火災。日本語の本数冊を焼失(11)。江戸公使館へ転勤。パークスの命により日本南部沿岸を回って瀬戸内海経由で戻り各地の情報を収集するために出港。長崎で宇和島藩士井関と会談(12)	陸前国三本木(宮城県三本木村)で横穴が発見され、珠玉145粒、土瓶4個、土器4,50出土。栗田寛『葬礼私考』を記す
慶応3	1867	徳川慶喜、征夷大將軍になる。孝明天皇、崩御(1)。幕府、孝明天皇の崩御により、長州征討軍の解兵を布告(2)。後藤象二郎、坂本龍馬ら、京都で薩摩藩士小松帯刀、西郷吉之助、大久保一蔵と会合、王政復古の密約を結ぶ(7)。薩長、倒幕拳兵の順序を約定、薩長芸三藩連盟成る。前土佐藩主山内容堂、後藤象二郎と福岡藩次に命じ、幕府に大政奉還を建議させる(11)。薩長芸三藩と岩倉具視ら、倒幕の勅命降下を策動。大政奉還(11)。坂本龍馬、中岡慎太郎京都の旅籠で殺害される(12)	パークスの横浜邸原因不明の焼失(1)。長州藩主、毛利敬親、三田尻で英国のキング提督と会見。遣欧特使徳川昭武渡仏、シーボルト同行(2)。慶喜大坂城でロッシュを引見。ロッシュ薩長二藩と英国の策謀を慶喜に警告する(3/25)。慶喜パークスを引見(4/29)。慶喜オランダ総領事ファン・ボルスブルックを引見(4/30)。慶喜ロッシュを引見(5/1)。慶喜パークス、ロッシュ、ボルスブルックを公式引見(5/2)。慶喜アメリカ代理公使ポートマンを引見(5/3)。英国軍艦イカラス号の水兵2名、長崎で殺害される(8/5)。慶喜、大坂城でロッシュを引見(8/24)。慶喜パークスを引見(8/26)。パークス、ケッペル提督と徳島で、阿波藩主蜂須賀斉裕を訪ねる(8/31)。パークス、大坂で老中板倉勝静と会見、不祥事をさけるため軍兵の大坂付近撤退を要求(12)	鹿児島で島津久光次男図書、家老新納刑部らと会談。宇和島で宇和島藩前藩主伊達宗城と会談し宗城から「英国策論」に同調する意見を聞く。兵庫の薩摩藩本陣で西郷と会談(1)。将軍の外国公使謁見の日程確認などのためミットフォードと大坂へ。ミットフォードと薩摩藩小松帯刀らと会談。英国が天皇と条約を結んでくれるよう依頼されるが、英国は内政干渉を表明。会津藩家老梶原らと会談して交友を結ぶ(2)。パークスらと軍艦で熱海に向かう(3)。ミットフォードらと大坂に將軍謁見のため向かう。謁見に立ち会い通訳(4)。宇和島藩主伊達宗城と大坂で会談。ワグマンとともに、東海道を江戸に向け発つ。掛川で凶徒に襲われる(6)。パークスらと函館に向け江戸を発つ(7)。パークスの命によりミットフォードと七尾から陸路大坂へ。西郷と会談後、將軍の謁見に随行。西郷と再び会談。パークスに随行し阿波藩主との会見を通訳(8)。後藤象二郎とイカラス号事件の話し合いを進め、友好関係を誓い合う。前土佐藩主山内容堂、高知城下の開成館でサトウを引見。長崎で木戸孝允、伊藤博文らと会食。この後イカラス号事件の究明のため長崎に残留。グラバー邸でジョセフ・ヒコから大政奉還の建白書構想を聞くが重要視しない(9)。大坂開市、兵庫開港の準備のため大坂へ出航(11)。薩長の大坂留守居役と会見して、在坂藩兵の大坂付近撤退を要求(12)	北海道小樽港付近で、手宮前洞窟から文字状の線刻画が発見される
明治元	1868	兵庫開港、大坂開市。王政復古。慶喜、京都より大坂に下る。江戸城二の丸、焼失。三条実美ら5公卿、入京し参内。伏見・鳥羽の戦い勃発。慶喜大阪城を退去し、開陽丸で江戸に向かう(1)。五箇条のご誓文。天皇、親政のため京都を出発(4)。慶喜、水戸に向かう。これにより、天皇京都に還幸(5)。浦上村の天主教徒4000余名を、34藩に拘留。官制を改定三権を分掌。東久世通禧(ミチトミ)、英米仏蘭伊普の各国使臣に局外中立の解除を要求。奥州列藩同盟(6)。官軍、上野の彰義隊を攻撃。江戸を東京と改称(9)。官軍、会津若松城へ総攻撃を開始。明治天皇即位の礼(10)。天皇、京都から東京に向かう。会津藩、官軍に降伏。榎本武揚ら、五稜郭を奪取(12)	徳川慶喜、大阪城でフランス公使ロッシュ、イギリス公使パークスと会見、下坂の事情を告げる。慶喜、大阪城で仏英米伊普の諸公使及びオランダ総領事と会見、イギリス公使、パークス大阪城で徳川慶喜と会見(1)、備前事件(備前藩兵、神戸駅で外国人と闘争)、新政府、外国との和親を布告、フランス公使ロッシュ、江戸城に慶喜を伺い、再挙を勧告。慶喜これを拒否、英米仏蘭伊普の6カ国使臣、局外中立を布告(2)、備前事件の責任者、滝善三郎を処刑、堺事件勃発、堺事件により土佐藩士を処刑、パークス参内途中に刺客に襲われる、天皇、ロッシュ、ボルスブルックを紫宸殿に引見、パークスを紫宸殿に引見、パークス襲撃の三枝、林田を梟首に、徒党3名を遠島、天皇、大坂東本願寺に行幸し、パークスとケッペル提督らを引見。パークス信任状を奉呈、三条実美、岩倉具視、晃親王ら、パークスと大阪東本願寺に引見。新潟の開港延期とキリスト教禁制の件で論議(5)、大総督府、戦傷士卒治療のため医官ウィリスを雇う(6)、浦上村の天主教徒処分に関する各国領事の抗議に対し、国法により処断の旨を回答(7)、	日本語書記官就任。パークスに随行し將軍との会見を通訳。陸奥宗光の来訪を受け、幕府と新政府の外交権掌握問題について会談(1)	越前国大石村(現福井県春江町)で銅鐸2口が発見された。遠江国芳川村(現静岡県浜松市)で銅鐸2口が発見された。

			大坂を開港(9)、イカラス号水兵殺害事件の関係を処罰、英仏普伊4カ国公使、横浜駐屯外国兵の撤去を日本政府に通告(12)		
明治2	1869	天皇、京都に向け、東京を出発(4)。五稜郭開城、戊辰戦争終結(6)。版籍奉還(7)。	東京開市。新潟開港。伊仏蘭諸公使、東京で天皇に謁見。英米普諸公使、天皇に謁見(1)。英米仏蘭伊独6カ国公使、局外中立の解除を宣言。東久世通禧(ミチトミ)ら、北独連邦代理公使フォン・プラントと会い、修好通商航海条約締結(2)	賜暇帰国(2)	
明治3	1870	平民の姓を許す(9)。兵制統一、英式陸軍、仏式海軍(10)。新律綱領布告(12)		英国から戻る(11)	備中国大島村津雲貝塚(現岡山県笠岡市)で、土器、人骨発見
明治4	1871	廃藩置県(8)。	パークス帰国(5)。岩倉使節団出発(12)	箱根、熱海、江ノ島へ旅行(8)	横山由清『尚古図録』を記す。古器物保存のための太政官布告発布。文部省に博物館設置。
明治5	1872	学制制定(8)。新橋―横浜間鉄道開業(10)。富岡製糸場開業(11)。太陽暦へ(12)	岩倉具視ら米国で大統領と会見(3)。マリア・ルーズ号事件(7)。岩倉ら英国ビクトリア女王に謁見、仏大統領と会見(12)	甲州街道の旅(1)。日光へ初めて旅行(3)。横須賀、金沢へ旅行(7)。日本アジア協会第1回例会で「琉球についての覚え書き」発表(10)。伊勢神宮などをまわり西国を旅行(11)	仁徳天皇陵が台風で崩壊し長持形石棺発見。奈良県生駒村(現生駒市)で美努連岡万呂の墓発見、墓誌銅板出土
明治6	1873	徴兵令制定(1)。地租改正条例制定(7)。征韓論争、板垣退助ら参議を辞職(10)		中山道経由で東京へ戻る(1)。甲州へ旅行(4)。丹沢へ旅行(11)。『開国史談』『近世史略』の英訳発表	香川県津田村(現津田町)の岩崎山古墳発掘(6)。熊本県江田村(現菊水町)の船山古墳発掘
明治7	1874	愛国公党結成、「民撰議院設立建白」提出(1)。佐賀の乱(2)	台湾出兵(5)	日光旅行(9)	太政官達で古墳発掘の際の届出方が発布(5)
明治8	1875	讒謗律、新聞紙条例公布(6)	英国公使館東京へ移転(4)。江華島事件(9)	賜暇帰国(2)。スイス、イタリア旅行(7～1876/1)	遺失物取扱規則発布
明治9	1876	秋月の乱、萩の乱勃発(10)	日朝修好条規調印(2)	日本公使館の2等書記官兼務を命じられる(7)	蟠川式胤『観古図説』刊行開始(3)
明治10	1877	地租軽減(1)。西南戦争(2～9)		鹿児島着、状況視察、西郷と会談(2)。横浜着(3)。甲府旅行(4)。富士登山(7)。群馬、日光へ旅行(9)	モース大森貝塚発見(6/17)。大森貝塚発掘(9～11)
明治11	1878	大久保利通暗殺(5)	関税自主権回復の条約改正方針決定(2)。	横須賀、浦賀へ旅行(2)。八丈島へ旅行(3)。立山、飛騨を旅行(7～8)。英国商船救助の答礼のため、済州島、釜山へ(11)	群馬県西大室の古墳群が発掘される(3)。モース大森貝塚について講演(6)
明治12	1879	沖縄県設置(4)	前米国大統領グラント来日(6)	大和地方旅行(5～6)。房総半島へ旅行(10)。関西旅行(11)	シーボルト『Notes on Japanese Archaeology』発表(6)
明治13	1880	愛国社、国会期成同盟に(3)	条約改正案を各国公使に交付(7)	長男栄太郎誕生(1)。	
				大室古墳群の調査(3/6～10)。日本アジア協会で「上野地方の古墳群発表(4/13)。	
				長野、新潟旅行(5～6)。朝鮮僧侶から朝鮮語を学ぶ(5～12)。日光旅行(9)。房総半島へ旅行(12)	モース『大森介塚編』邦文発表
明治14	1881	大隈ら参議罷免(明治14年の政変)、自由党結成(10)		木更津旅行(1)。『中部・北部日本旅行案内』出版(3)。南アルプス旅行(7～8)。英国皇太子らと関西旅行(11)。発熱発作で寝込む(12)	上野で内国勸業博覧会開催(3)。ミルン「最近における地理学変化と日本における石器時代」を英人人類学雑誌に発表
明治15	1882	立憲改進黨結成(3)。福島事件(11)		熱海旅行(2)。秩父、甲府、箱根旅行(5)。神戸から東海道を通り、2度目の富士登山(8～9)。伊香保、草津旅行(11)。賜暇帰国(12)	
	以降			次男久吉誕生(1883/3)。バンコクへ駐在代表兼総領事として出発(1884/1)。休暇でバンコクから東京の妻、兼を訪ねる(1884/10)。日光旅行(1884/11)。休暇で再び日本へ、箱根日光旅行(1886/6～8)。英国国教会で堅信礼を受ける。ウルグアイ代理公使に任命される(1888/10)。モロッコの駐劄特命全權公使として着任(1893/8)。サーの称号を得る(1895/6)。日本に着任(1895/12)。日本勤務終了(1900/	

				5)。清国駐劄特命全權大使として着任(1900/10)。賜暇帰国(1903/1～6)。清国勤務終了で帰国途中日本に立ち寄り久吉と日光旅行(1906/5)。外交官引退、ハーグの国際仲裁裁判所の英国代表に任命される(1906/10)。久吉が植物研究のため英国滞在(1910/4～1916)。手元のすべての日本関係蔵書売却(1913/1・6)。『一外交官の見た明治維新』出版(1921)。栄太郎死去(1926/6)。心不全、脳血栓のためオタリー・セント・メリーで死去(1929/8/26)	
--	--	--	--	---	--

参考文献

- アーネスト・サトウ　（坂田精一訳）　1960　『一外交官の見た明治維新』上下　岩波書店
- 加藤友康 他　2001　『日本史総合年表』　吉川弘文館
- 斎藤忠　1993　『日本考古学史年表』　学生社
- 斎藤忠　1980　『年表で見る日本の発掘・発見史』奈良時代～大正篇　NHK　ブックス
- 対外関係史総合年表編集委員会　1999　『対外関係史総合年表』　吉川弘文館
- 横浜開港資料館　2001　『図説アーネスト・サトウ』　有隣堂